# 輪池雜記

四

特別
イ 5
1663
4

貴重文庫

あいし　たてい

ちはや

ほそたすき　極彩　衣笠

入綿袍　たのの袍

衣文考

ひちふくろ

ぬさあうろ



36 2262

# 履襪部

## けいし

履 あかるし　履屣 あかるし　平底木履 さゞら

けいしハ木履なり文字にく履と書これふ
三種あり第一ハ尋常の木履をいふ二ハいかく
ぐつと木履を附たるをいふ　以上信西入道の紫宸殿の仮屋の図に見へ
和名抄にくゝなり　三ハ当世ゆきさ木履をいふ　唐書くつさう
信西入道の紫宸殿の仮屋の図に見へ
乃かしらはりあるをはくゝろひてゆりいふ

源弘賢著

あえかなるひうちこうれかまたるもあるの
けいしゝうりなるものをすけさせうゝとさもとかゝら
もてさいさて　弘賢曰けいしゝ殿なり所ゝ絲鞋也をすけ
させて絲鞋乃裏をとをすなりけいしゝ殿の緒をすけさせるなりうゝと
なる絲鞋なるにつゝとか歟恐にあり
後光嚴院宿梅莫云まつまちくれりて
なるゝ〻いのかしゝいるあひをけるの
つるかこうひうちにうちみられてあしゝふ
をすけさせなゝてゝにもてさいれるく
條名皆赤梅わゝいの紫赤云あゝ殿なるゝ絲鞋をゝいとゝふ物あり
ゝいゝとりはうあるとさて其ゝ所ゝ

ワさあのあゝえおさぬゝへときて常と
しゝてそのうへふゝ所ゝ所ゝ所のひの色ゝり
さゝてはかこうまたふれりさまもあゝことく
さゝりをけりもまあ所をさゝ所ゝ女郎ゝいは
ものゝゝそれをもつゝひとゝふなりさゝるのも
にナニスゝさゝるくくまるあれをまるあるを
ゝ所の美あまて京へふあゝ美をきて打ひ球
すかゝゝさあをきるしをはかるあるあたと
くくさゝりとさすそれあるさ所ゝつ
葉黄苑云寛元五年四月一日　一賀茂祭調進物

屐子資来六具在帖紙六帖足駄六足蘋芳扇六本

伊呂波字類抄云屐ケイシ 屐屣 已上同 弘賢曰此書ハ編集の時代詳ならねど之も寺院の記に禅宗を載されハいと古きものならず

新撰字鏡云屐 跂 同 渠逆反 屩也 阿志加太 又 木久豆 弘賢曰屩ハ屩乃あやまりなり

和名類聚鈔 履襪類 云屐兼名苑云屐一名足下 ハアシタ 屐 音奇逆反 和名阿師太 弘賢曰いと古き通の本履なり枕冊子にみえたるけりしきの図が成家乃絵にあり

清少納言枕冊子云ことくしくおもふもの正月に乃別当にありてよろこびの中の日を待つときにくちをきてのいてたまへるふるまひけりしきさへきよくゆゝしくたくし 弘賢曰これハそのせくゝあしたといふもの

なる ○瑟琳音義云孔叢子著高方屐屐 見平原君 とみえしそこらのたかきへき

又回さしけるやうにあるものあやめぬことあさましくはあしすなつきたるにけりしの法やゝかあやかくふつら耳はく法いゆるとさきて 弘賢

これハ華ぐつと本履小消ることのすて和名類聚鈔ニクツハケノアシタとさしたるあるなるや

和名類聚鈔 履襪類 云屣 屐 史記注云屣 所綺反 與 徙同 漢語抄云屣 屐ハ久都々計 屐之属也 乃阿之太 一云屐子 弘賢曰此製今も庭ちるは行ゐるなり

晉書宣帝紀云関中多蒺藜帝使軍士二千人著軟材平底木屐前行蒺藜悉著屐然後馬歩倶進

弘賢曰これそも庭下駄とて板を緒とすけたるものなり

四・四

舞曲景清云ぬつたるけいたうあぬ華
ゆて結とたてけうえくをくはに 弘賢曰これ その華絃
乃ぬ里下駄と
ふぬ多家

けいしゑ紀

ゆいしゑ紀い笑義系の付齋王の出供小出る
ものなり

左経記云万壽五年四月十七日云〻参齋院催行雜
事未刻覽走童十人履子著十四人 次覽牛十一頭
云〻廿日乙酉天陰甚雨上卿於客殿雨間覽走童
十人履子著十四人

中右記寛治四年四月十八日齋王御禊云〻既書
云高倉上御所以前履子著等渡御前〻如恒
永昌記長治三年四月廿日高内裏王御禊云〻覽
履子著十四人相次覽絲鞋著十人
中右記大治四年四月十九日齋王御禊云已申事具由
履子著十四人絲鞋著十人云〻一御車手振十人取物十人
二御車履子著八人手振 三車履子著六人手振 廿五
六人取物八人 六人取物六人
笑義系也傍馬十二匹童女馬四匹履子著十四人
絲鞋著十人等云〻御輿云〻御車手振廿四人 二車
女別當履子著八人 手振廿八人取物六人 三車宣旨履子著六人手振
廿六人取物六人

山槐記仁安二年四月廿七日云今日齋院御禊也
云々次履子糸鞋等出中門之東屏経客殿北方西
行廻南方出東鳥井了　此事不審之事也儀式
南方云々中略於牛車預南方西行履子同欲進行間六位
次宣旨申云於牛車内此玉手履子又可参也云々予示
長貞云履子之牛可候乎長貞承仰遂返了履子如牛可候
宣人才如牛猶持糸鞋先可候云々由申是一両候一沸車後也
云々事ナリ履子糸鞋共可作也示
下仕遣糸束成敗之間群集走候歟

亭子院歌合序

右のことくにいにしへのふみをたつねわかきをあつ
めいくさのうたをつらねゆめのうちにて孫鞋をとり
てこれをつけかくことのあるふみをあつめて

加茂祭給履著圖　此絵いにしへ市絵合之時絵業卿所進之
寛元為信卿詞書所如此也

# 釋名

けいし（清少納言枕冊子）履（ケイシ）履履（ケイシ）（伊呂波字類抄）○弘賢曰けいしは履の字音の轉なり履履をケイシとよむなり和名類聚抄小澤俊物と引て一云履なりとかけるも又通すべし○イとは化粧して履と書るを唐人の異稱なり歟物徐嶠之等例あり又一説を引るは補忘と云る説歟詳なる事にはあらずいつれの字にもかくなるべしなり

るさけいし（清少納言枕冊子）履（アシタ）足下（アシタ）和名類聚抄○弘賢曰足下は俗字なるアシタこはアシカタの略語なり新撰字鏡ゝ履又跂とアシカタともキクツともよめり釋名云履ハ屨也為両足稽足駄（葉黄記）以踐泥也

跂（アシタダ）新撰字鏡○瑟琳音義優渠戟及藻書袁盎履步行三十里謂令有齒履也と注又大寶積經寶履の下波離問佛經著履の注ゝ下たるとて字典ゝ或作ゝ跂と注ゝ莊子天地篇跂屩為服とつゝふとあれは假借をるとも久しきなり

履（アシタ）履履（アシタ）（伊呂波字類抄）和名類聚抄○弘賢曰革履ハ履名なり履履アシタに造り附ゝたる歟

平底木屐 晋書○弘賢曰平底といふ名かんにとつふ

方頭屐(オトコゲタ) 圓頭屐(アイガタ) 叢葉 大屐(ナンケタ)

云御覧云晋製屐婦人ハ円頭男子ハ方頭蓋作意欲別男女也大康中婦人皆方頭屐与男子無異晋書謝霊運好登山常著大屐上則去前歯下則去後歯北史斎宗道暉好著大屐謁見刺将仰頭挙肘拝於屐上

露卯屐(サシゲタ)

斎書旧為屐者歯皆達楄上名曰露卯太元中忽不徹名曰陰卯

手

平足駄 手足駄

判官物語云むさし坊が法師に二くさり物と出たりにあしだをかくうき法師に書

写法師のあしだをさくとかきて中ふ角茶ハあしだなどにかけるつくとあるもむさしもあるなすとかきて云く弘首は平あしの製作詳ならず名目によりて考ふれば切下駄といふ真つきにみて厠にてはく足駄といふまでや同じ足駄の内もかさて平なたる真と知るべしよりておもふに昔物語書紀十五比叡山僧芸僧従生語云我山ニテ厠ニ居タリシ間ニ云々即チ厠ヨリ房ニモ不寄シテ手足駄ヲ履キ乍ラ走リ下テ云々とみえたる手ハ平の字の誤りたるにやとまでおもへるや大便の時にはける足駄の図ハ異疾冊子福富冊子図之絵師絵詞本にみえたる図サンゲタとみえたるあり掲るつもて説ハ平底冊子腸絞より膿汁いづる病者の手に足駄をはくしありそを手足駄とやといへるか考ふべし

屐系(アシメシ) 鼻緝(ハナシ) 鼻縄(ハナヲ)

和名類聚抄履襪具云屐系附鼻緝 風俗通云延喜中京師長者著屐婦女始嫁至漆画五采為系 今按唐韻胡計切緒也然則和名阿之太乎 本草云履鼻縄

異疾冊子 [illegible]





福富冊子 [illegible]





圓光上師絵詞 [illegible]

## 正誤

春曙抄云けいしぐ川なるとの此草紙の奥にも
ころさけいしとさへと記さるゝは皆の訛
和名集ふゝの皆乃訛あまたも此名ハなし 弘賢曰 皆の訛
なりと云ろハ蘇なり和名抄よるしと云へるハあしその書を云便
まそへるへし戊志うさるしなるも又うへとさとあるホの侍従
に皆乃喜を指之とかけるもあやまりなりむかしてはゝのと
みあしす押さとをつふ詞なるをよしハ上るいへきとし
枕草子紫家抄 壺井義知云けいしぐ川なるとの緒とす
けさせうし末緒とさせるともてさいぎ義按けいし
ぐ川とい履子とうけ和名抄皆の訛 山槐記等
みもみえたりさつまく係ぬりのあしさといふ

四ノ十

にはかなき笑ひ草につまれる園もこんてこうの枝
あるいはとゝのつる俗りこうさけいしとさへくれ
ゐれいと伊勢ものもたいまてよくさこえたり
異邦のおこりい雪文之呂分之推の事にて
海内経弘賢曰けいしぐろと一物の名なるいあやまり
なりうるをきせてあるより未緒と傳ほそれ
くくしかすみ陳めるのあたとくるやとかるもいつまく
さるより異邦のおこりい和名類聚鈔に足下とさる字
面ふなつこそ消金をしなむ履雪に始りにあり寸三代い後
ゝれあるくし郭思畫論云三代こゝの人皆跣足三代已後始服木
履とゝえ
こう

履襪部

疾冊子手足駄圖

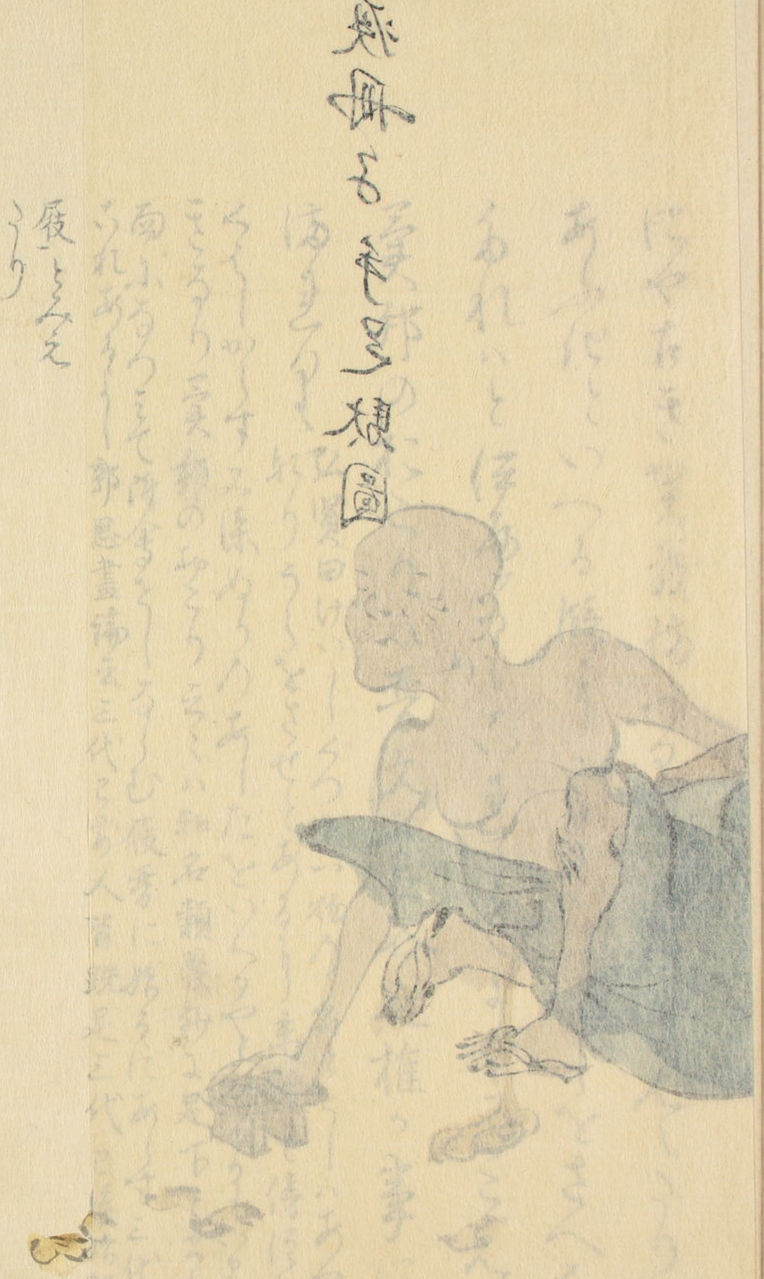
弘賢著

四十一

疾冊子 手足駄圖

履襪部

弘賢著



履とえ
ぞり

履襪部

弘賢著

## 履襪部

### しかい 絲鞋

しかいく絲をもて組たる鞋なり 和名類聚鈔

源弘賢著

の時齋王の侍女に絲鞋著とつふる 中古紀俗名鈔

又舞人も用ゐたり 傳抄

和名類聚鈔履襪類 云絲鞋雜色立成 云絲鞋 伊止乃久都今

按俗云之賀伊

中古紀大治四年四月廿五日賀茂祭也云〻傳馬

十二匹童女馬四匹殿子著十四人絲鞋著十人
倭名紫東抄わらくつ紫東云あらいしへらいとつふ和ありて云
へらいくつはあこえ片をねたらへとさ給ぞ於
へふふるのわらきそこのへらこれちう由こそく
つくとす無くかふとあまてらんあいひま我は
けてうちくたらうかふとも川女御代よりへらい
もあしこらうるりしくハへらいはをらくへさりの之
云く女御さいまはへらいくもはとへらてつひとつふ
なり
清少納言枕冊子云祭ふのはいたくわらへのかしらく
かうもあらひはくろひてありいつる称えの
ちらひうちこられかくまたらともあらけいし
く川なるのなもすけさせうしとさと称めとまて
さくとさて
弘賢曰へらいに小川とれるへくくへらいのことなるへし
とけさとけいしの語なりうさせと云へく
和名類聚抄小履類云弘知波女宜須
補履下也音丁今按下緇人以牛皮爲屐下云
へらいのうに華とはくろとるへし
此字乎とらしたる比タチハメの事なるへし 坊按校回うとさせ
とはくつのシキを張ことにや 弘賢曰絲鞋もシキを張りたるにや 考ふへし
儀式下 小忌 衆人擁従小忌 付布絹 摺袴 付下袴 襪 錦糸
下重 付半臂 并袍 付袷單 糸鞋
糸鞋韈上著之欲著昇堂上無憚參入之時深泥者
欲著糸鞋著淺沓但取去數云云糸鞋作在八幡也
四ノ十四

仍通氏朝臣舞人勅任之時尋別当章清卿也

# 冠服部

## ちくや　褌　裈　裈　裈

ちくやの名和名類聚鈔ニ本朝式ヲ引テ褌讀知波良と云とそれもその製い詳ならず延喜式ニ細布褌望陀布褌六尺と志るされたるまてにチハヤと
よめるよりおもうに日本紀ニ褌とヘモとよめるもこれなるへし世俗のヘタレとゝなるものこと歟ろへしさ
ればちくやあらん歟ちくやニ種あり今世俗ニ云ふ所チハヤ二種あり

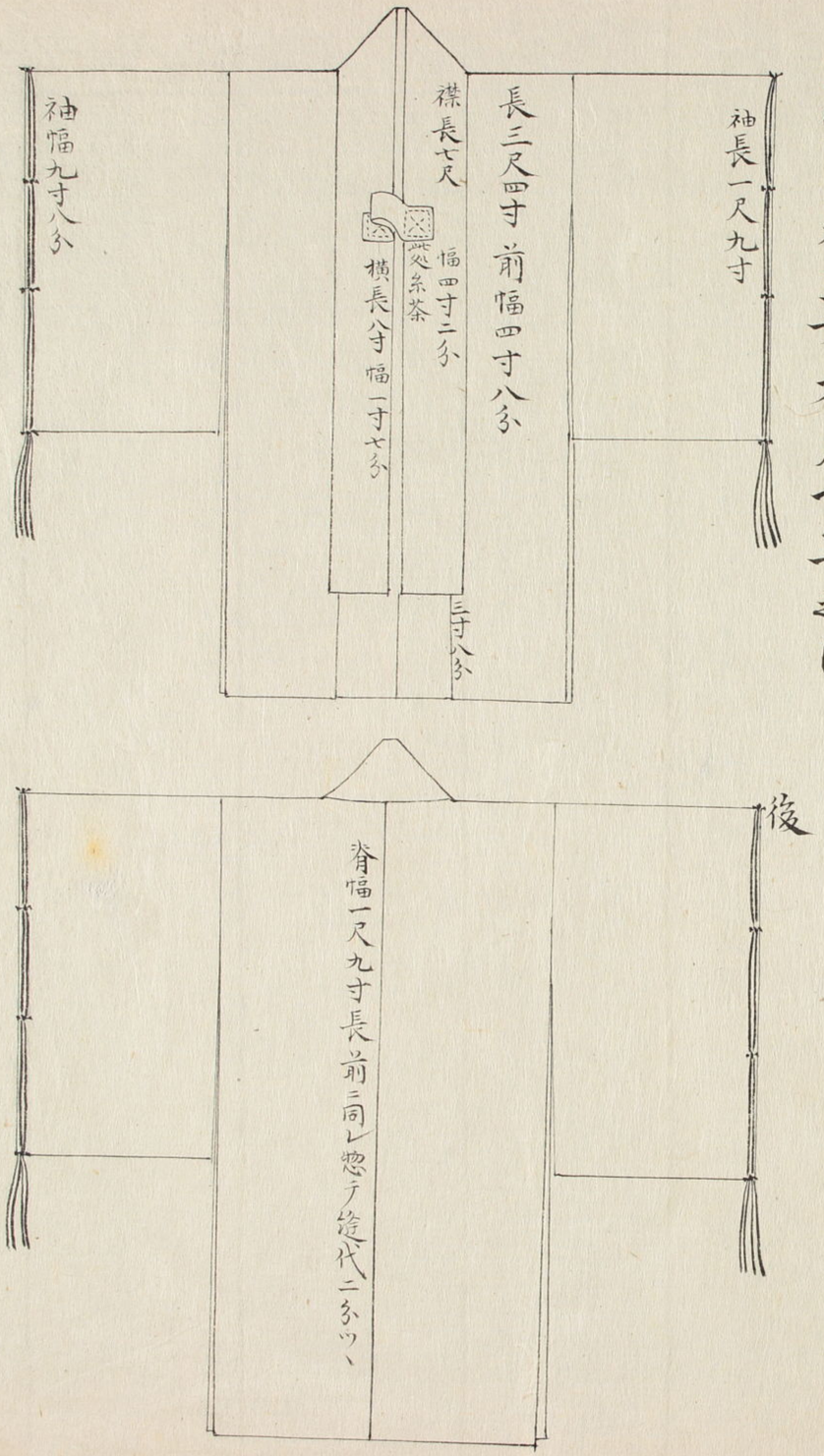
[illegible]の大祓の[illegible]の[illegible]の[illegible]二人春日若宮の[illegible]仕丁の
襷[illegible]ひうちよりれく地と引[illegible]五文[illegible]白
布[illegible]の大祓の用[illegible]の新掌會の時造酒司の
部と宿人[illegible]際衣の料の絶と給ひ仕丁[illegible]調布
の裨と[illegible]延喜式[illegible]にれの際衣と裨と合く
チハヤとつるるわと[illegible]春日に用ふ[illegible]の
頭巾[illegible]のごとく[illegible]に[illegible]文の
[illegible]の[illegible]の[illegible]
ちつやたるもの[illegible]ひつりて[illegible]

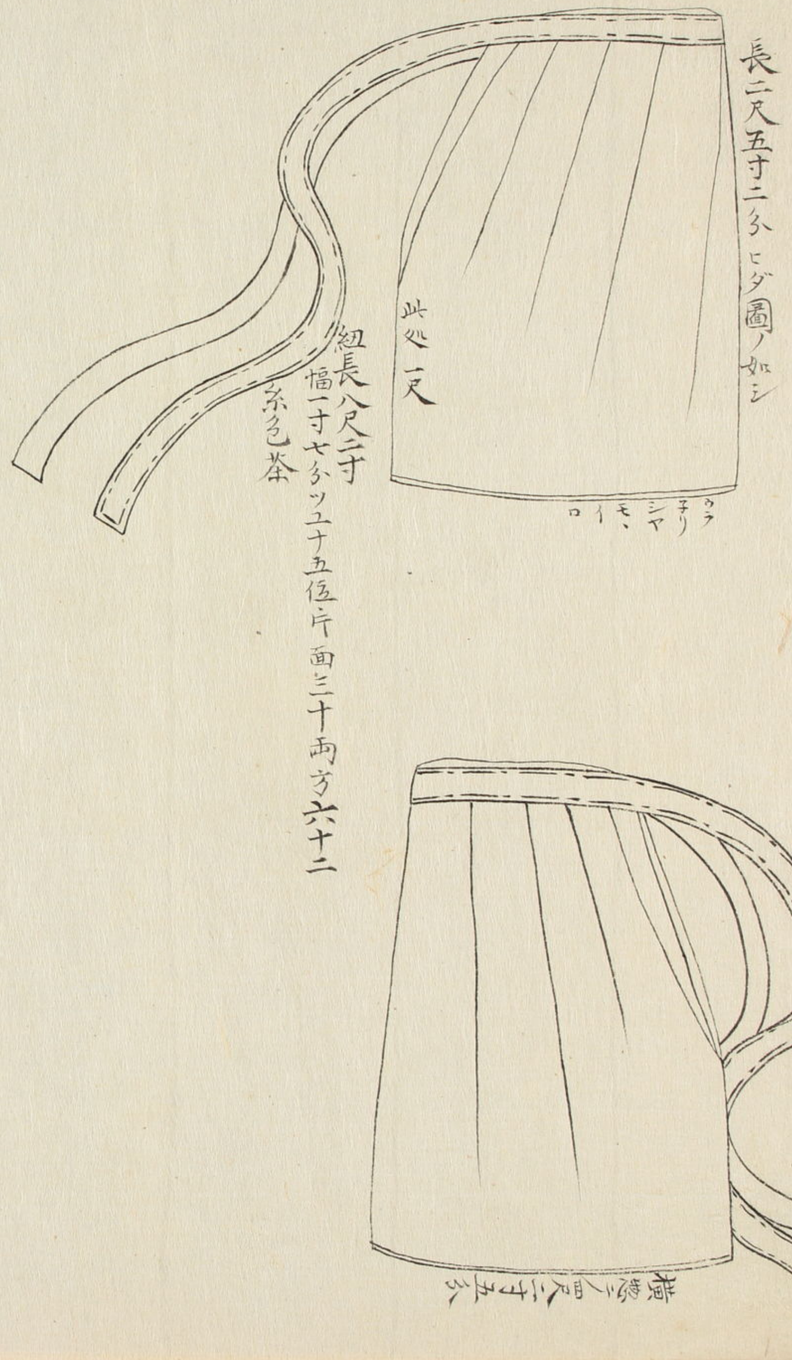
[illegible]（後典侍日記）[illegible]すたるものと[illegible]
やうのもの

和名類聚鈔（衣服具）云本朝式云襷裨各一條（裨讀知波夜今按不詳或本裨字）

延喜式（采女司）云凡神今食新掌會官人二人各給
細布裨一條采女八人各望陁布裨一條（六尺下條裨皆准此）
其新掌會給布又造酒司云新掌會白黑二酒料云
彩見中務式
仕丁二人各庸布一段調布頭巾六條（別二尺）裨六條（別六尺）
○上文ハ酒部二人宿人各給際衣料絶一疋綿二屯とみえたるもの

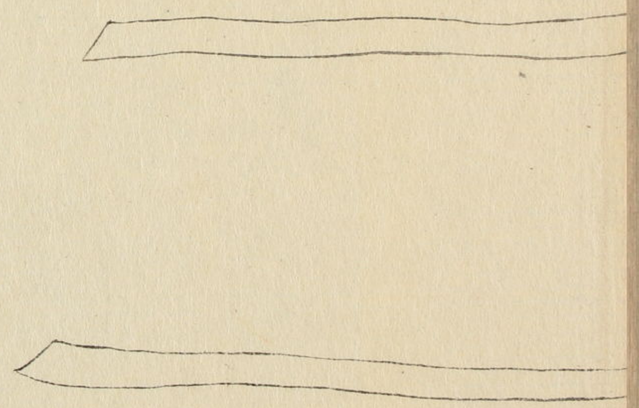
# 出雲大社巫女着用千早之圖

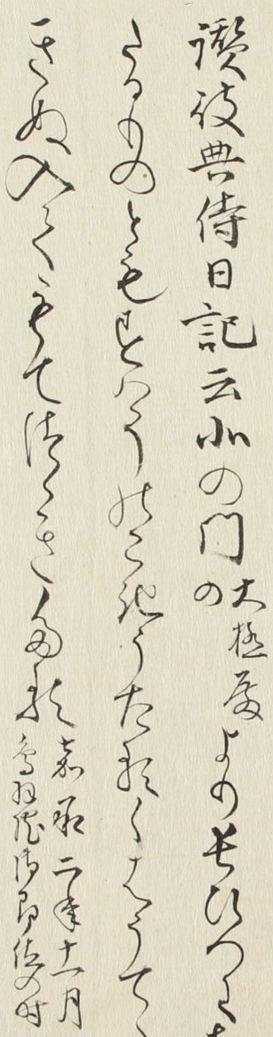





# 春日若宮祭禮松之下渡り次第

白布長サ五丈余
雨下ホル泥ニ入レリ





甲一二十

## 釋名

和訓栞云日本紀に嚴忌とイチハヤシとよめるは也後世所云
ちはやと訓するも其同し小忌衣也布にて造る身二幅にて袖一幅にて末服
わかさく山藍をもて摺たるに水紋染たるのおもて袖は縫さと 褌 和
紙捻もて括るといふ 弘賢曰小忌衣とチハヤといふことあるはいや誤なるへし 名
類聚鈔字鏡抄チハヤ○タスキ 褌 和名類聚鈔注○褌 恵琳音義引考聲
○日本紀にへモと訓せり 云褌補也引説文云褌接也益也○字鏡抄
まへチハヤの 襅 伊呂波字類抄○又末部云へタリ詩経古訓 襷 伊呂波
よろしかるへし 云へタレ○字鏡抄にはヒトへキヌとよめり 字類抄
○和名抄には 千早 出雲大
タスキとよめり 社所用

# 裝束部

源弘賢著

不忍文庫

## ほそたなの

細長本名細長袍とも云記 袍事記 袍とも云異し
てかさねきるいとふるきものなり元世名
目延長天暦のはしめ頃之れを 中右記 部類 始るものお
もうしあり形ちくし

中右記部類云延長四年六月一日夜及曉皇后
產男兒 村上天皇 成明親王 五日 夜ヒル 自東宮有送物參產事

五位九人四位三人給白細長袴一具所衣一襲所袴孫
一重七歳自大内養度事度之給仁連公忠義人
二人五位細長一重加袴一具義人細長一重加袴一具
天暦四年五月廿四日寅魁男皇子誕生廿七日
信朝臣給御湯殿之室孫五位源公
廉給禄白張細長一襲袴一具
細長ハ幼童ハ皇子及ハ殿上ハ童
女乃服なり産屋ハ用袍裁縫い狩衣の
くひかさねやうにさてさてさてさてさて物也
なとも裁し身のたけ四尺四寸袖のさきを一尺
六寸也表白裏白裏えらし深るる成樣ハ細長ハ
文樣しやうさくさくさくさく兵範記保元三年正月廿九日関白殿者
三条君御元服事あり三条君御装束細長
袍指貫とめさせ給ふ色明服なりとも
さて又女房装束抄建暦元年四月十日姫君の
真菜姫君白重織物乃細長なりしし織物
乃小袖二重細長と用ふ時ハあこめ袴と用ひ
す色ハ例なりとてさてさての師説曰元永二年
或秘記ハ五月廿八日皇子降誕六月二日者又産
院より御養産ハ事あり三条御産ハ合よい

織物の帯広一筋と細し　三尺巾　菱の文花形　一合より綾

の帯広一筋と細し　三尺巾　菱の文小文　一合いろ綾の

帯縮緬二筋幸織の清縮緬一筋と細し　名二幅長　尺入り

あり　又一合ろ目あり　云々　紫東要抄○要略抄ハ毎井義忠撰ル

元亦の記と引ゆえんハ東人細長ハ帯広ハ用ひのるるに第

四巻ハ帯広ハ用てらの記ハ只織物の帯広

綾の帯広とあって細長ハ実の人よりなるべし

みくるひ弘賢按ずるに実の人ハ定せられ有

勅賜度広ハ定の定見細長ハ定子浮紋有

著用ハ定ハ定ハ帯広ハ別細長なるべ

あるべしかるべしてこれに毎紙ハ広ハ名てあらはさるべ

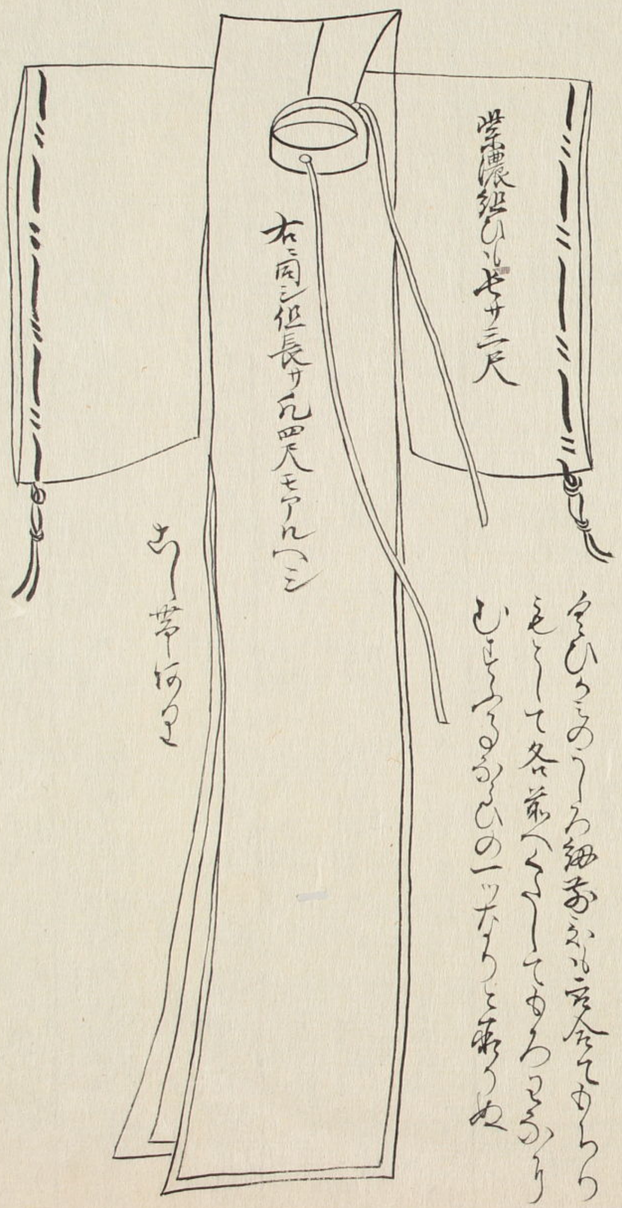
保亦ハ記ハ村上原代古土記録の文にたるべしなり源氏

記ハ村上原代古土記録の男接中納言雅兼の記なり

ハ古中辞注ハ注古なり帯縮緬の長五尺とあるこに引

紫東要抄所載細長之図

うちき図



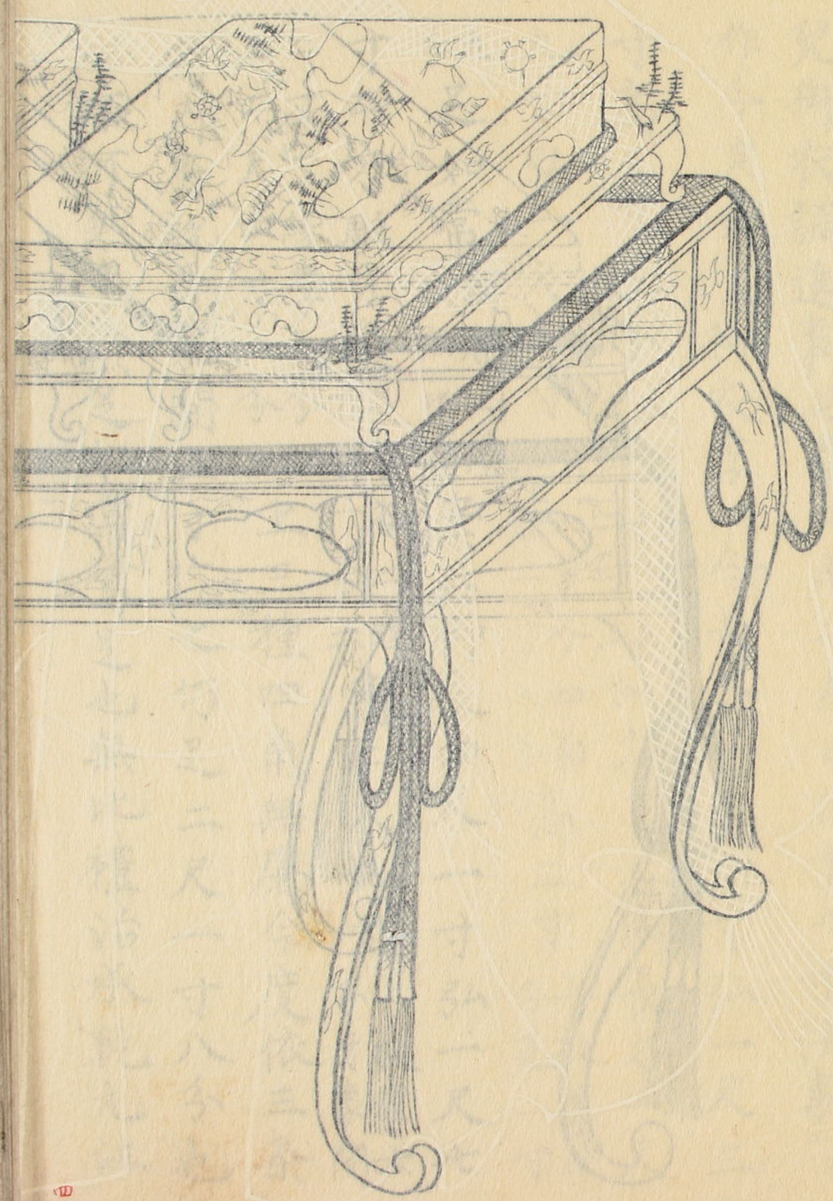
弘賢日京都より江戸へ進せら新〻帝細長ハ
袖結なるべしこれ[illegible]高貴の[illegible]
料として帝[illegible]ふかき[illegible]神[illegible]
[illegible]

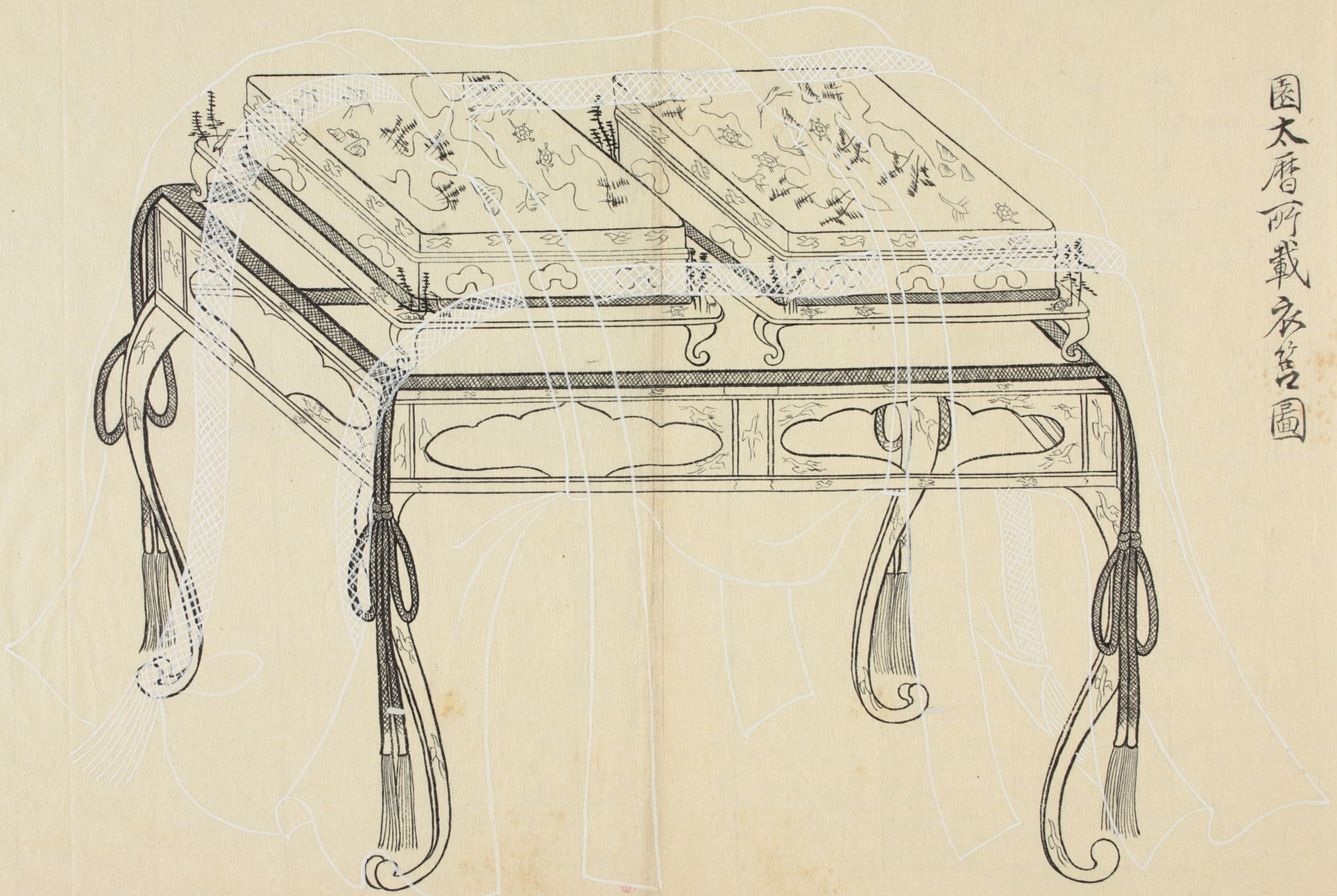
文化十年三月十五日　禁裏帝所より
竹千代君へ進せら新〻帝細長[illegible]文[illegible]
[illegible]

帝細長　表白小亀甲綾縫張　裏辛綿紬紬　一領帝單　綾文小菱　一
領帝袴　白小袴　甲綾　一條　同　辛綿　一條　右一疋　帝細長
同上　一領帝單　同上　一領帝袴　同上　綾　一條　右一疋
入帷　表白小菱ノ綾子ノ入り　裏白小菱ウラ　織物裏　菱
ミカキ中陰　ミカキ　裏辛綿ハリミカキ　白辛綿　等有之　葉一腰　帶二筋
以上辛櫃二合ニ納
[illegible]

華ゑく紫帀帯等のさ為園を磨よみと
しおとおりやうたてまつり宣旨の
はなはだく結たてまつる無さ也ばかり植
祀よみたまれいたるの仕園を磨みてつ
ぎ[illegible]やあらんと言給ふ科面白かる
玉はず調をば御もちまつりもし
しらの白い山科面調をなりとこそ

園太暦所載衣装図　廿五日記

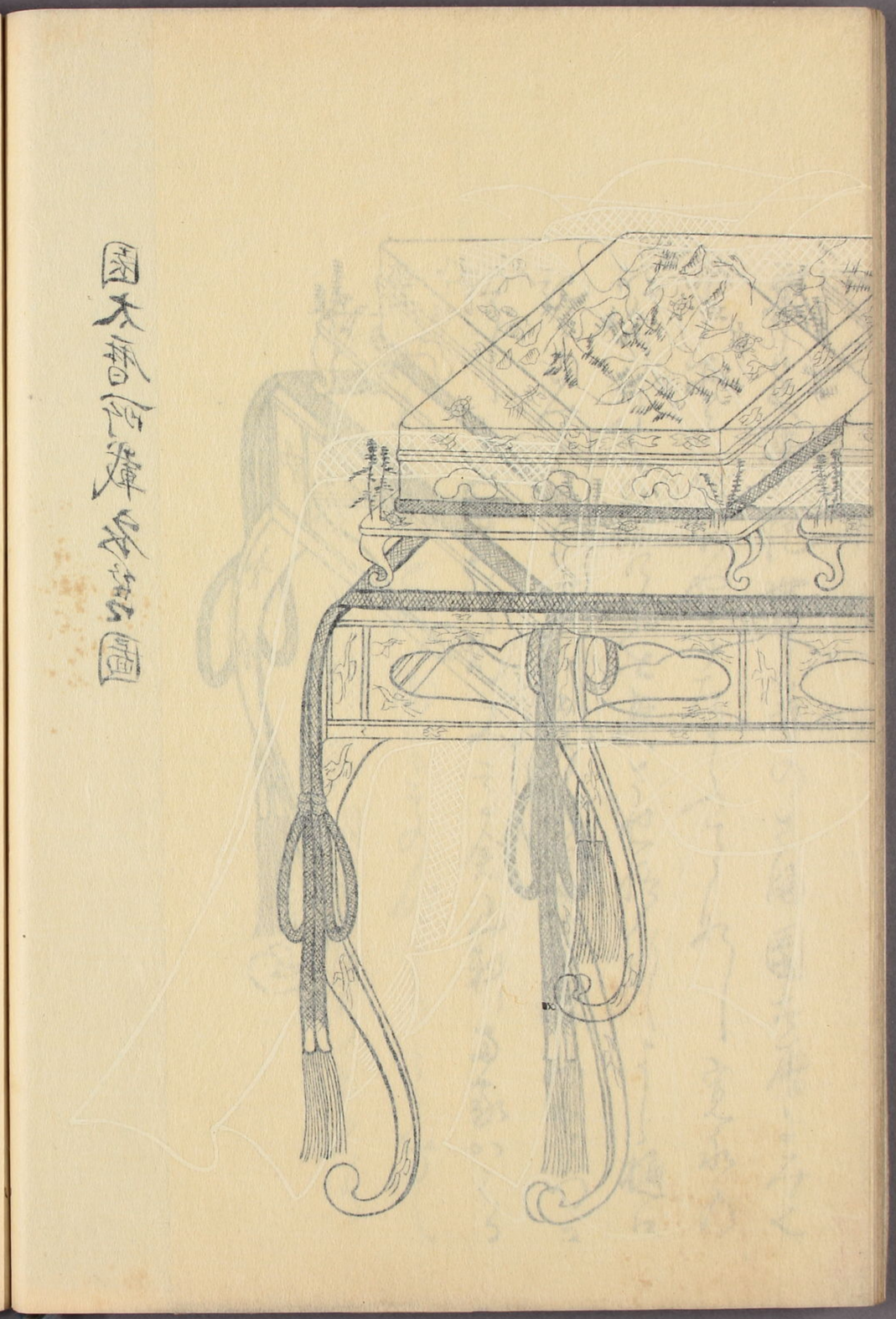




園太曆所載衣笥圖

園太曆延慶四年二月廿五日記

兒御衣調進事延慶四年二月日注置之寸法事木作分用鐵尺御衣莒二合長各一尺六寸弘一尺三寸高三寸五分蓋深一寸身深二寸五分花足二脚長各一尺九寸弘一尺六寸以上莒外四面各餘一寸五分高三寸上板厚五分足二寸五分足如常或有比禮或無比禮案一脚長四尺一寸弘一尺七寸四方分歟牙象長方各二短方各一合六高二尺八寸上板厚六分牙象間二寸下緣厚六分足二尺四寸八分以上三種四角無廉今度依三条前内府説牙象間五寸作之仍足二尺一寸八分也必不可然事歟足如常鷺足也無比禮治承乾元注



文長三尺九寸五分高二尺八寸五分絹寸法者用
竹量案覆一帖無文白穀無裏三幅長一丈三尺四
方捻之同帶二筋同穀無裏捻云々長一丈七寸今
度依三条前内府説各以一幅四重帖之弘二寸許
莊嚴事御衣莒蓋内外并身外塗胡粉今度下地塗白粉其上塗
雲母以白銅作洌濵三打盖上〻〻立松十五本小松
高三寸許葉莖皆白鶴五龜三巖三各置蓋上其所必不定鳴
上水中皆依風情置之以紙薄彫洌濵莒身外四方
各一押之今度莒長方洌濵各三短方洌濵各二押之以紙薄彫千鳥蓋
外四方押之以白龜甲三倍浮織物身内四方并底

押之蓋内不押以白鎖置口如常花足表裏四方四足皆
塗胡粉今度雲母同御莒花足中央御莒居程深一分許彫
窪可落入御莒也為不令動也件彫窪内面白龜甲
三倍浮織物押之彫窪四方際白平組押廻之半入
莒下半出莒外平組外縁端一寸許不押之其地雲母四
角白松各三本立之四方鶴亀巖等各立之四角并
長方中央白銅金物打之短方無金物四足有皆金物案
裏并四方四足皆塗胡粉今度雲母同花足上扱面白亀甲
三倍浮織物押之如注文者二幅押云々然而面弘一尺七寸也仍織物寸法無不足
之間以一幅押之為似二幅以白平組押中央也其面四方并中央白平組

押廻之四角組上打白銅耳金各一付白丸緒総角
白総金物有之総未在四足皆鼻九緒組雖練糸総猶用生糸例也
上板四角并長方中央下縁四角并長方中央等白
銅金物打之短方金物無四方牙象六各有白銅伏輪四
足有同皆金物上板四方并下縁四方及四角柱牙
象板等同塗胡粉以雲母畫鶴含松云〻今度下地塗雲母仍
以銀紙薄彫飛鶴千鳥等所〻押之案覆三幅縫合目六筋白平組一弘
寸押之組末糸餘之以胡粉畫鶴含松形今度依治承注文并三条前内
府説以白糸縫紙彫之許所〻押之鶴長二寸同帯無文白御細長二具表
白小亀甲綾練張裏平絹練張中倍無之二領重之無差別

綾罩常文如一領重之御級組結定分六尺五寸以上
一具分如此御身長四尺五寸御身弘六寸五分御
大頭上四寸三分下四寸七分御袖引立一尺七寸御袖弘八寸
御襠袴三帖二帖白小亀甲綾練張両面一帖白平絹両面
以上弘二幅長五尺入帷二帖御菅二新表白小葵綾
弘三幅長七尺紫張塗之裏平絹同中倍無之御裏二帖
御菅二新表白小葵浮織物裏白遠菱綾塗之平絹中倍
以上オメル弘二幅縫合目白平組押之弘七分長七尺組末糸餘
之以上
抑今日御衣上簡土御門中納言通顕卿下簡予沙

汰也予調進之躰御細長二領白浮綾各二重之在御單御袿袴
二帖白綾入帷二白綾御裏二〻各一〻納御衣筥
二合件衣筥各居花足件花足二雙居鷲足紫上件上
有白穀生覆以同穀為帶結之御衣筥調様先地塗
米粉其上塗雲母其上以白銅作洲濱三打之件洲
濱上并傍白松并同鶴同亀等作立之筥ノ〻ハ二八
以紙薄一方洲濱一〻押之筥蓋内外塗雲母身内白
亀甲綾置白鐍口花足同塗雲母中ノ〻ホミニ押
白亀甲綾〻ホミトフチノ高所トノ間ニ押白平
組四角立松鶴亀等少々足ニ有白銅金物紫同塗

雲母面押例白綾同面耳ニ有伏組又同中央縦サ
マニ巡有伏組牙象并足等有白銅金物又〻ハニ
金物有之四角并中央也縦サマ中央無之又四足
打金物歯白組其躰如簾鉤覆白生穀三幅各縫目
并耳ニ伏組有之白鶴食松或以白糸縫之或以紙
薄押之云〻以上納長櫃但案勢分大也難納長櫃
仍付長櫃上下家司一人衣冠付之以上三条前内
府乾元昭訓門院御産之時沙汰之次第尋問用之

寛永十八年紀州日記 六十月三日

勅使菊亭大納言 飛鳥井大納言 院使清閑寺

大納言 国母孫より西条大納言 御対顔

禁中より 若君孫へ御産の御産衣仕立て遣

仕立衣し仕立て遣 禁中小儿ちと云ふ孫とと

て仕立て

紀年録 六十月 若君御誕生御祝儀

勅使 院使参向従 禁裏産衣 号細長白草織亀甲紋身一幅長サ如常衣服廣袖有頭髪者以襟巡頸如常襟下襲菱紋白陵也白組緒蜷結二筋自左右肩垂至前制法如前 草衣 著細長上之白衣也 以上三領以白平紬包之 俗謂之平包

各藏之銀箱其蓋上作鶴亀形又襁褓三帖亀甲紋白綾此包之物也小兒員別藏之銀箱同前形以上二箱各以白綾包之以載花足而置于案上案長サ高共四尺許以白木作之塗白粉所々有銀鍍花足似白銀二箱案共以草白羅覆之各御贈進其外御祝儀アリ品々

光明峯寺子息誕生之時有

勅賜産衣之事定是細長也大抵此細長

皇太子降誕時有御着衣之由云々

文臺ノ如キモノハ華足トモナリ

文匣ハ衣筥トモノナリ

## 樋口殿之記二

嚴有院殿公方家御誕生ノ時自　禁裏被遣候　御産著箱并案○案ノ長サ五尺余幅二尺許高サ三尺許全体胡粉ニテ塗リミカキナリ四脚ノサキ銀ノ逆輪地紋幸菱鶴ノ紋ケホリ有之四角ニ白キ總アリ脚ノ所々ニ銀紙ニテ舞鶴ノ形ヲ切テヲセリ四方ノヨコテニスカシアリスカシノ間ニ銀紙ニテ小キ千鳥ノ形ヲ切テヲセリ上ニ又文臺ノコトクノ臺両アリコレモ胡粉ヌリ四脚ノ先ニ銀ノ逆輪アリコノ二ツノ上ニヤラウ蓋ノ文匣

四ノ三十九

二ツアリコレモ胡粉ヌリコノ箱ノワキ四方ニ
銀紙ニテ洲濱形ヲキリテ二ツ宛四方ニ押ス蓋
ノ上ニ銀ニテ嶋形ヲ薄ク三ツ四ツシテウチツ
ケテアリ其間ニ銀ノ小キ岩七ツ八ツアリコノ
上并ニ脇ヘカケテ銀ノ若松三枝ツヽアリテ高
サ三寸ノ木五十七本サシテアリテ松葉モトク
トニ葉ニメコノ葉ノ數五十七本ニメ十三万余
アリサテ高サ三寸ハカリノ銀ノ鶴合十八アリ
コレハタチテイル也雄ハロヲ開テ羽ヲヒロケ
テイル雌ハロヲ閉テ羽ヲスホメテアリ又亀大

張ハ折立ヒ
ベシ

小十五コレモ銀ニテ作リ所〻ニカサリテナラ
ヘテアリコレハミナ華飾ノ心ナリ小キ岩ニハ
菊水ノケホリアリテ文匣二ツノ内ヘ産着細長
イルコノ箱ヲノスル臺ナリ文匣ノ内白キ亀甲
ノ紋ノカラヲリニテ張テアリ亀甲ノ内ニ地紋
アリ案ノ上白キ亀甲ノ紋アル唐織ニテハレリ
四方ト中筋トニ白キタクホクニテ縁トレリコ
レヲクミ伏ト云リコノ下地ノ木地ハ城殿(キト)和泉
ニテコレラヘ即胡粉ニテヌリ右銀薄紙ノ細工
モコレニテ調フカナモノハ泰阿弥ニテ調フ南

鐐四貫目ツク手間ニ二貫目ハカリト也恭阿弥
ハ東山殿ノ同朋ノ末ナリ代〻ノ御朱印アリテ
田中ニテ高百石トレリ職人ニコレホト代〻ノ
慣ナル朱印モチタルハコレナリ越前ト云江戸
ニ住ス弟ハ清三郎ト云フ京油小路中町下ル東
側ニ住ス伊勢賀茂貴布祢春日祇園八幡松尾稲
荷等十ケ所ニ迁宮アレハ諸道具ヲコレニテ調
進ストナリ先年千代姫様ノ誕生前久シク中絶
ノ〻ヲ御トリタテ高倉殿ヘ被仰付出来タレ所
姫君様故ニ不入當公方様ノトキ上ルソノトキ

ノハ今度ノヨリ鹿相ニナリタルトソコレハ先
例ニテカハラヌヤウニシタキモノナリトソ今
度モ高倉殿ヘトアルヲサアレハ高倉ノ家ニ限
ルニナルユヘニ中院通茂ノ為ニハ高倉ハ叔父
ナレ所婚ノ山科持言ニサセタキトテ如此ナル
サアレハ今ヨリハ両家カハルカハルニナレリ
サレ所高倉ニハ図アリ山科ニハ図ナキヲ一條
殿ニアルヲ通茂ノ支覚ニテ申出メ恭阿弥カ家
ニ焼残テアル図ト云テ調ラルトナリ當公方様ノ
トキハ寛永八年八月三日ニ誕生両傳奏ハ飛鳥井雅章ノ

舍兄雅宣ト令出川右府ト也八月廿五日ニ出京
道中静ニ下向アレトノフニテ二十日フリホト
ニ江戸ヘ入テ九月廿五日ニ御目見脱近ノ衆モ
同前ナリコノ産著箱八五十日御祝トテ誕生ノ
五十日目ノ御祝ニ用ルナリ

九月廿五日ハ誤ナリ
十月三日御對顔
ナリ

服飾部

源弘賢著

入裲袍　下の入紐

入裲の袍は政官の表用せらるる也
三剪花ハ裲と花花ともに見へたるを入ておの
方に三寸縫付る形なり　図あり

下の入紐

さてこの入紐ハ裲の上がへ下がへ下の方
図あり

江家次第 内侍細記云 内豎頸来之、仰云、召式乃司兵
乃司、二荷、丞来之、近代昇自階不可然 壇仍此日二
荷、丞表衣、裲放紐 孔裲の下の入紐とあるは此なるべし 今は有
[illegible]

和歌

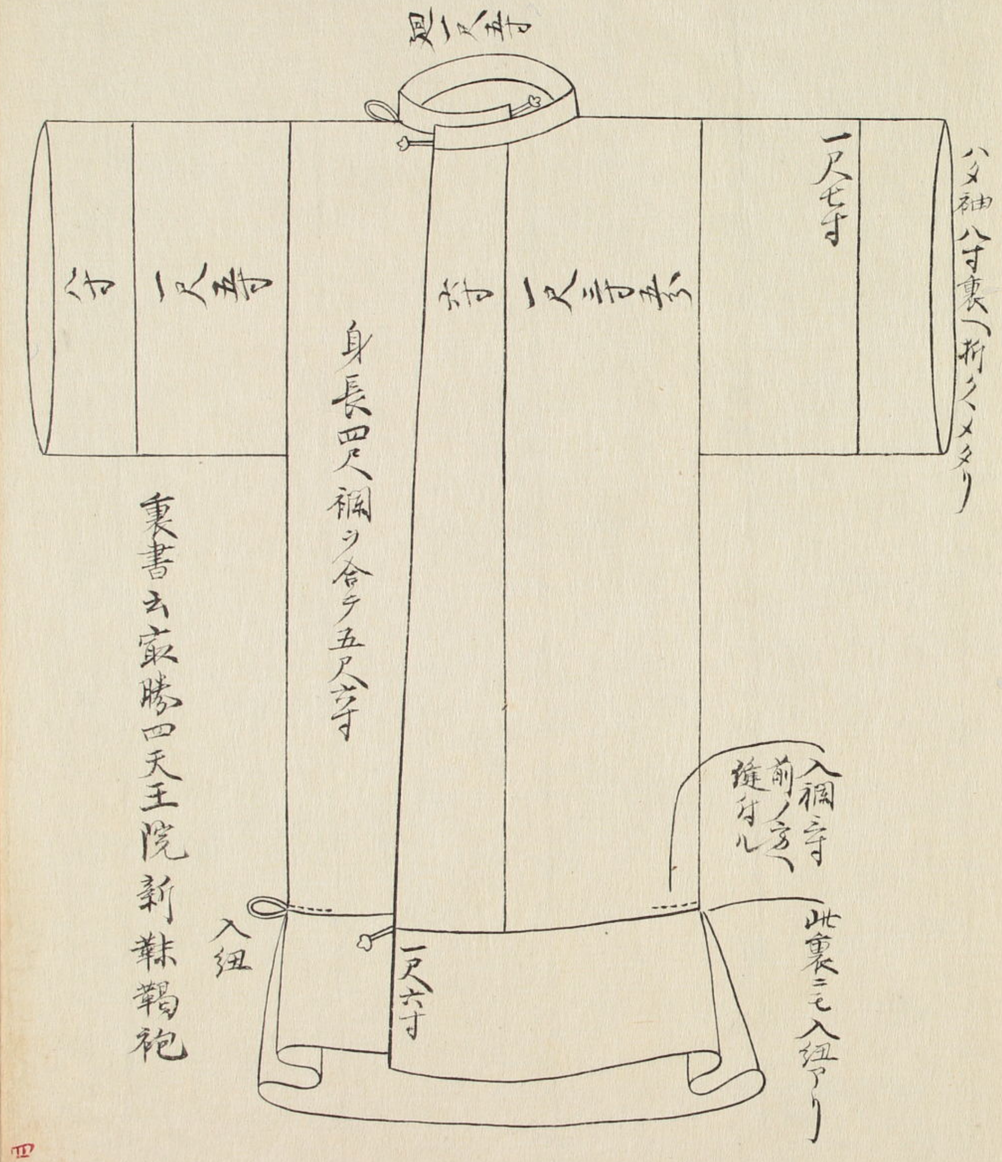
古今和歌古抄

[illegible]

[illegible]

[illegible]

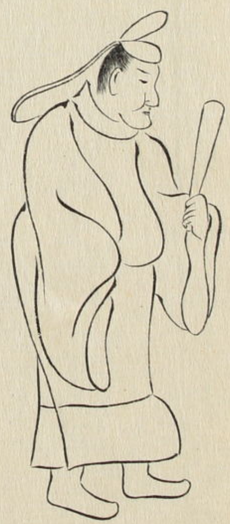
東大寺八幡宮蔵入裲袍圖 下入紐有




裏書云 寂勝四天王院新鞦袍

# 年中行事繪入襴袍着用図

賭弓



此射所ニアリ

大饗

此ニハ襴出ル

# 衣文考

文化八年七月山科家ヨリ預リ
廿日ヨリ謄写事ヲ始ム

四-三十八

# 裝束部

## 衣文

衣文のいつること白川院七十代の御宇始て侍り
けること白川院八十代の御宇始て侍りけ
ること後鳥羽院の御宇始て侍りけ
仰ありて上下おなじ風ふ裝束にて烏帽子
のみ用ひられて此上居こそのみ
ありしかとこのもとのもとこ

源弘賢著

不忍文庫

四-三十九

かさなりて大きかよりむすひ市ぬさ
えんさうしかくさ宮石新古引続世長云
市ぬきもおぐくさば えうりしもこつく
ぬるてもれるるとけるとの法ようきひえうりしさ
ふるこえ風しふるいてきさかてさしはて之度
しるあかつ学先れをぬ人なし 大日寺と高野寺
ふるやも 和ふるしほふこの歌まえるんの鞍多と
いるるう義へよれるしことのみるしを 續世徒非
文とつとの始たるけるむしとと上の市紫来に多る人
しよしる義多徒ふ義へ移記と引て記されるけるしを今のこく
歌業ふるさたうたるこるこるの人市髪ともるる市髪とも
かさたりしれるる うる石文の故実と大阪市つ徳大寺の

寺家を伝へ及ぶる大阪市つ高倉に徳大寺
山科ふ法文法てれの原ふ絶しを 松岡辰方説 弘賢
桜をるう諸家と業とつる書にたる物しふ見
しことれる特法輪三條大阪市つ高倉山科と
標題して三條の紫来多目等れ事とゆたし
大阪市つふ著市の風と相接と知るふ寺家を
うれのと所法をしにやを代ふる金山科ふ
をゆたを言倉ふ大阪市つのぬく著市の事と
なりと須進の風もれるる山科ふ内義阪芸蔵
まつを須を法とをとをすとみをうう 賢百山科
ふ調を法

[illegible]

## 大炊御門

此家炊御門経宗卿子勅仕[illegible]事不見[illegible]

永和大嘗会記云炊御門経宗大炊御門

大納言宗実勅仕[illegible]代と此家なるべし炊御門経宗の

秘事口伝[illegible]人[illegible]受[illegible]

大嘗会記云炊御門経宗[illegible]総角[illegible]

大炊御門一流[illegible]永和[illegible]彼家系

[illegible]永徳炊御門[illegible]

## 高倉

応永炊御門即位の後永俊羽長[illegible]会同大嘗会に永藤

朝臣[illegible]会[illegible]

[illegible]

薄成記云正長二年正月一日小朝拝出御幼主例

左兵衛権佐永豊羽長[illegible]会著衣冠奉仕御総角入道

永藤在御前元徳大寺大炊御門家相傳此変近代

皆以断絶了而永藤卿一流不失故實

松岡辰方曰大炊御門家衣文のこと[illegible]大納言

経音卿法華寺内大臣[illegible]経秀[illegible]会家門也

[illegible]人[illegible]実[illegible]花山七家[illegible]

院大炊御門中山郡仗舎井殿之家今世人とゝ世間
郡仗之屋敷之家ゆへ用ひらるゝ所也　あて之代ゝ
大炊御門家の衣文と用ひ来りて世流布
ゆゑ用ひらるゝ所也　天寶政七年新造内裏
御遷幸ハ仗舎也　他家あるゆへ此家と用ひらる
所也なるべし

## 德大寺

德大寺家ハ法服紫衣来ル所ハ清水
薄戒記ニ見ヘ　山科と山科ハ行ヘ
らるゝ　ゆへ不見あり　松岡辰方曰
德大寺家ハ衣文と山科家ハ行ヘ

## 山科

とゝ　ゆへ　ゆへ　ゆへ　ゆへ
衣文ハ　ゆへ　ゆへ　ゆへ　ゆへ
山科家御衣文小作しゆへ不見　衣の如し
山科權中納言國卿記云文明六年正月一日天晴
若宮御方御紫衣源中納言（雅行）被来予御茶菓事也
シリハケノ御服メシ上ニ御半尻　松帝御文菊唐草
也同八年正月一日四方拜如例云ゝ御服源大納言（雅行）
参御前紫衣来予同月二十日内侍所御神楽有ゝ
四時分ヨリ始御紫衣源大納言御紫衣来予也（雅行卿ハ
庭田家
ナリ）

山科殿天納言継卿記云享禄二年正月一日四方
拜ニ御服着侍ル廿細川右京大夫範久朝臣侍衣文祖父也天文二年正月一日四方拜ニ先言金
三位奉仕御服侍ル前紫衣予祖父也同七年正月
一日四方拜ニ御服高倉三位侍ル前紫衣ニ事也
日記御下ニ書予祖父同廿年正月一日四方拜御衣
文予御前紫衣言金永相朝臣祖父也天文四年ノ山科家記ニ載
記ニ云七日内裏ニ出仕ス御拜ニ正長ヨリ文
明ニ至テ五十年ノ内ニ毎年ノ如ク同ノ衣ノ山科教言
卿記ノ應永十二年ヨリ十六年ニ至テ御拜ニ紫衣ニ
仕ノ事ヲ見ル形式ノ如ク故実ヲ尋ル也紫衣ニ
云承應ノ比無ニ出仕宣旨永
年ニ至御拜ニ出仕ス故ニ

庭田家御紫衣ニ出仕事
庭田家御紫衣ニ出仕ス事上ニ記ス言国卿
記ニ見ル所ノ如ク但シ家業ニ成ル
ヲ以テ

高倉山科家別の事
言倉山科家今ハ家ノ名ノミ有リ
言継卿記云天文十四年六月一日及暮予東帯
藤黄門言倉ヘ参内ウシロシ直シ参内ス是ハ
ヲ以テ別ニ成ルニ

山科家御紫衣被進の事

當山科家（権中納言惟定卿）説云南都御服頒進の事
和州東連綿寺（弘野白浜於井上羅卿の説云て山科家領と云云）
為一（文治元年の文の内に載せの如く為一と云云）
寺領（文治元年の文の内に載せの如く寺領と云云）
（山科家）
（文治元年の文の内に載せの如く山科家）
（文治元年の文の内に載せの如く）

将軍家ハ高倉天皇ト用ラルル事

南都将軍家ハ言倉御右文ヲ為ル事ト不見
たり事

鹿苑院殿（義満公）御元服記云（應安元年四月十九日）御裳束師
永享朝臣（言倉）
善光院殿（義教公）御元服記云（正長二年三月九日）於御會所清

備服ニ儀内ニ有ニ侍従ニ侍従永享朝臣
（言倉）
善右冠勤其役ニ後同令著裳束給役人同
光源院殿（義輝公）御元服記云（天文十五年十二月十九日）若君御服
御美用ニ被ニ蒙ニ中納言ニ（言倉永相同永家）被勤ニ
御家ハ勅修寺家山科家ニ言倉家ト用
ニ也ニ事

天正慶長ニ於ニ勅修寺家ニ御裳束ト
於ニ二家ニ之儀ハ光豊卿の記ニ云ニ元和元年
山科家ハ南方ニ文化ニ為ニ侍ニ言緒卿の記ニ
ニ云ニ弘ニ今世ニ言倉家ト用ニ也

猶ホ元和寛永ニ至テ御祭内ニ付キうとひ侍
へきなり
勧修寺権大納言光豊卿記云天正十八年十二月廿九
日長兄家成出御亭試改着黄櫨染雑袍御物三
献柳原大納言東金家成侍伊賀掛襟朱茶色四郎
次郎亭事御覧中条 内々御覧黄櫨染後湯漬参
内気六七人お伴ある相庭金之板縄し（左兵衛督御禅）毎年之
板ツて給ぞ候なり
又曰慶長十六年三月廿日条 内々付御亭之内
大御所并御子達可有黄櫨染之御直ニ大御所之御

也退出用意中付也家忠日記云同年同月廿六日
大神君今日参内アリ衣冠ヲ勧修寺光豊ノ
亭ニ於テ整ヘ玉フ光豊卿記云同日 今日大御所参
内於亭ニ而御装束被召候 当御所御参候
之御同御子達ハ先母衣召御供 常ニ御装束ニ而
御参内不及御子達 天顔拝候ニ付 参
御庭其之様相参亭へ御退出御膳進上
中御相伴女御 勧修寺相伴権大納言広橋亭
等也 弘賢曰以上御装束に係はる人の名みえされとも他家の人也 せしものゝ知らるゝ名と記さるへからぬ此家にて云々
相伴ある
亀し

四ノ四十五

山科宰相言緒卿記云慶長廿年（元和元）正月廿日
大樹御参内御二條御在所御直衣文御お召文
冷泉中納言為満六月十五日大樹御参内御直
衣文同六月廿一日大樹御参内御直衣文
御上洛記云寛永三年六月十八日御参内言衆
中納言（泰重）参仕中院通村卿中院通茂卿
直衣御指貫とめさせられ御参内十九年十二月廿八日御参内八條宮（智仁親王）
御直衣御指貫とめさせられ御参内ハ慶長十九年ハ西陣焼
四月廿二日御元服（後水尾天皇）ハ御直衣御指貫

将軍宣下御拝任御直衣ハ御直衣御参内
ハ御直衣ハ御直衣ハ御直衣（言衆無位）御直衣ハ
御直衣ハ御直衣言衆御直衣ハ御直衣

御家御紫束言衆御直衣ハ事

此ハ御直衣ハ年紀ハ考ヘ元ハ御直衣
御直衣ハ御直衣ハ御直衣ハ御直衣
ハ御直衣ハ山科家御直衣ハ
記録ハ御直衣ハ

御家御紫束山科家御直衣の事

山科宰相言緒卿記云慶長廿年元和元正月九日
武家大御所太閤御供衆山科萬可渕進以板倉
伊賀守仰命アリ二月十八日依召参内紫衣古今色目ニ事御尋アリ申上ル吹日ニ会
有御供召被召出多ク処恐シテ書物不所持容
知ラセ言上ニ及有御沙汰四月廿三日前将軍予
覺悟御褒美也先度紫衣方ニ事禁中ヨリ
仰アリ萬書進作ル首尾奇特ニ也今日仰アリ
大樹御紫衣ノ事ノ仕立可申仰アリ其後衣服
方事御尋アリ申上ル五月廿五日前太閤御
道服渕進可申有仰六月廿九日前太閤女房アン
サイ御ツサ西人大御所道服ノ縫裁ニ孫ノ伝
ニ也被申則教授ス

[redacted]

[redacted]

# 器財部 文房

## 文房嚢袋 臂袋 土嚢

源弘賢著

不忍文庫

文房袋ハ小〻進士及其の他紙筆墨を納て臂に懸ル袋也（私の袋の類を舎等に用ひしを云ふ）雲州消息及び永昌記長秋記人車記江談抄古今著聞集に見えたり（江談抄若聞集にハ土嚢と書たり）假借なるべし

土嚢と製人孫負幹ゝ臂嚢私考にくわし

雲州消息云丁条省門状右学徒奉試畧文袋硯用物吉注云袋硯者登前省時入書籍懸臂

袋也

永昌記曰天永元年三月十九日有省試事相具朝隆向省門中略堂監名学生次光叅入左手持袋各着長靴前在硯臺大輔給題省官傳給学生

長秋記曰保延元年四月十八日賀茂祭也餝馬具中略鞍加良美尾挾注云用青皮縫之如臂袋

人車記曰仁平四年六月廿日貢士等登省也次貢士乘車隨身臂囊有納者相具淺沓向朱雀門下中略次試衆懸袋於左注云長和平相公臂袋依重代物在家今度用之納千禄字書造紙一冊硯筆墨各一紙屋紙三枚或湿紙於硯或入硯瓶是為書寫題字也而切韻押韻等入之今度強不入之

江談抄云白居易鶴舞日高見飲渭竜昇雲不殘晴後山川清江以言件以言詩被誦之歟以言即為誦師讀件句之時中略為憲朝臣同在其座件朝臣每文場所隨身之嚢名曰土嚢此入抄筆之器也聞誦此詩不堪情感入頭於嚢而涕淚数行時

人或感或笑云々

古今著聞集巻第四 文学

晴後山清くふかくして人言
はなはだまれなり帰嵩鶴舞日高見飲渭新昇
雲不知とはなりて人言すなわち諸説はなはだ
あまたなり為憲朝臣を産ふ給けふかくして土
嚢小路と入事後とかけまみふ人求を感
求を知ひらを皮為憲八文場たるに嚢小物物
を入て陸奥へ下るに土嚢とは名付あるを言り
臂袋とふとよるに此ものにうきしを
上の短書の説を見さるをふや

他ノ例ニヨルニコノ二字除クベシ

臂嚢私考云貞幹嘗於一名刹子院見其所傳
之一破綾嚢綾淡紅裏白絹其製長一尺廣八寸口底
各有穿紬存者終一二以青韋貫結如尾韜穿紬其
数口底各十六全體如書嚢竊按右嚢之製書
嚢今存者多或書略載其製燧嚢今稀存之類其形雖大
小長短不同而裁縫則無二今臂嚢之製雖不
可考而與書嚢藥嚢之類不別製可推知也今
熟視此破嚢為臂嚢不可疑即其可徴者三長
秋記曰尾挾用青皮縫之如臂袋一佛刹所傳
古綾嚢其體如尾挾尾挾尾韜也。其一臂嚢懸臂則以

人或感或笑云々

古今著聞集巻第四 文学 晴後山清くふくとゝ云言はゝ海つゝけて帰嵩鶴舞日高見飲渭於昇雲不拭くはくりて心言すゝかち諸はくそよこあまをふを為憲朝臣を身ふ伯けふきくて土ヂ嚢小路と入乗後とかゝけまみふ人求を感ー求を知ひ今見は為憲小文場たゝり嚢小物物を入て酒をしくふと土嚢とは名付ゆ見高

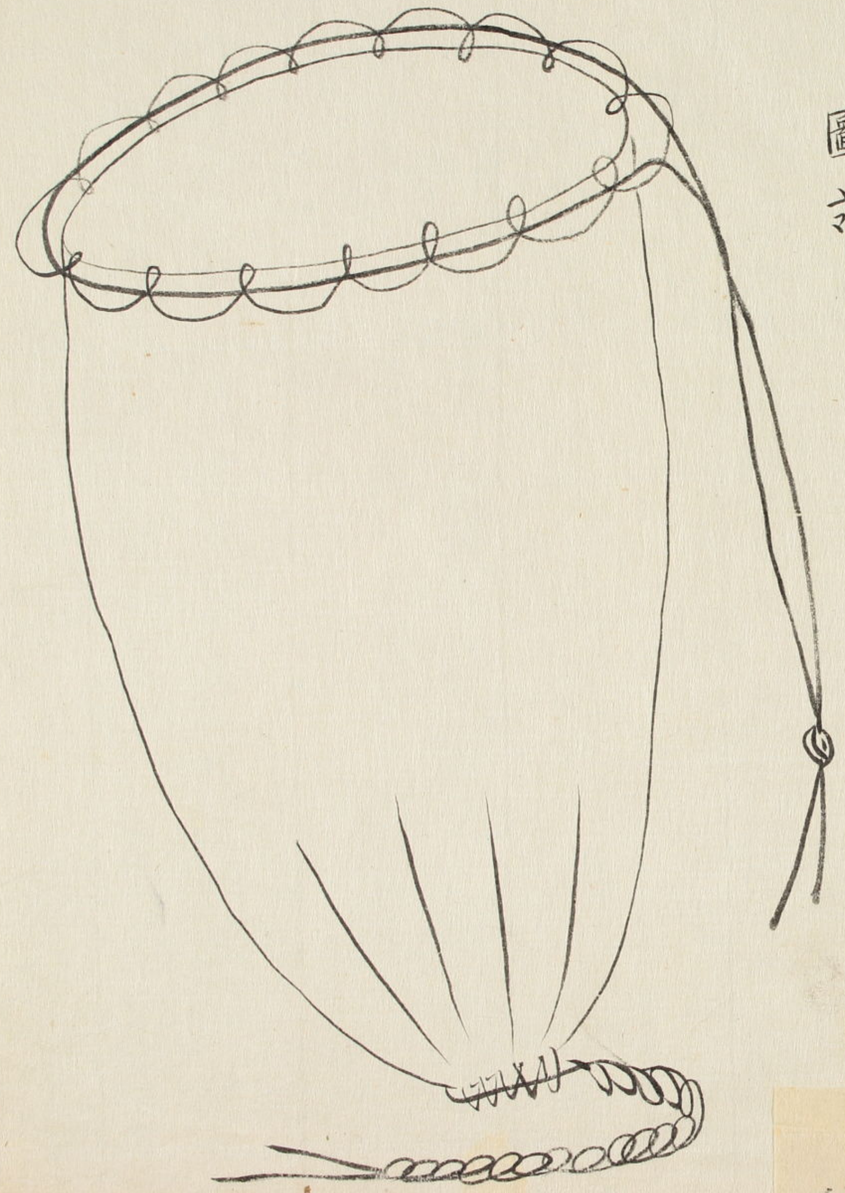
臂袋てふゆとよもたゝ此ゆにくさしを上の短書の説を見さゆ見ゝふや

製作

臂嚢私考云貞幹嘗於一名利子院見其所傳之一破綾嚢綾淡紅裏白絹其製長一尺廣八寸口底各有穿絹存者終一二以青韋貫結如尾鞘穿絹其数口底各十六全體如書嚢竊按右嚢之製書嚢今存者多薬嚢或書略載其製燧嚢今稀存之類其形雖大小長短不同而裁縫則無二今臂嚢之製雖不可考而與書嚢薬嚢之類不別製可推知也今熟視此破嚢為臂嚢不可疑即其可徴者三長秋記曰尾挾用青皮縫之如臂袋一佛利所傳古綾嚢其體如尾挾尾挾尾鞘也。其一臂嚢懸臂則以

底重上頭自為襞積右綾囊其痕其二古綾囊裏所々墨汁點汚非他囊可知其三紐長今按口底各四尺許葢古制袍袖一尺二寸大尺四尺紐足以懸臂底為封結者倣書囊

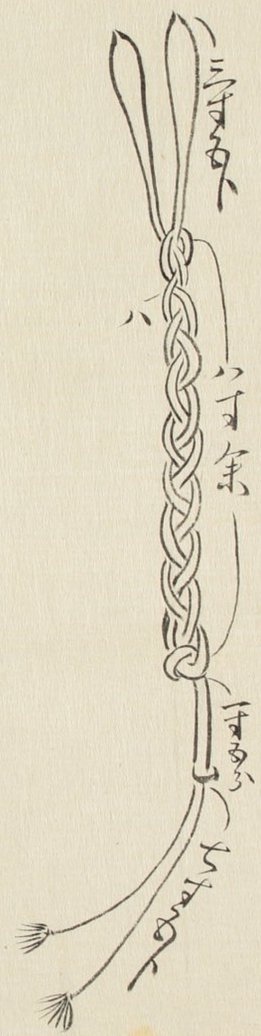
圖式



圖式ノ中サシ
未ダシク
ヒラヘシ

四・五十一

或人刑藏臂嚢一口、表萠黄晒布、裏白晒布、長一尺九寸、廣一尺、口二寸五分裂、カ、リ糸白メイハク、口緒白長九尺餘、底緒如圖、




ぬさ袋　むすび袋　すさび袋

ぬさ袋とは祓のたむけのぬさをいれる袋をいふ　ぬさとは白たへのこさめ乃ごとくにちらすをいふ

袋は細袋を用ゆ　むすび袋もすさび袋も皆細袋のごとし

そのゝ小形の古今和歌集頃及び後撰集抄きに集源氏物語にみゆ

古今和歌集形ぬさ袋の格式の

不忍文庫

のみちのかみにたむくるものなれはかのおしへ
神を道祖神ともいひさへのかみともいひ手向
の神ともいへりこのぬさのさたはいろいろにて
たてまつるもの也手向には手にとりて神にまいらせ
さゝけたてまつるもの也されはやかてたむけともいふ [illegible]
またぬさはぬさといふ事のとをさゝけてそのみちのかみには
紙を用けるにやみな絹の字乃さたなりけり
後撰和歌集にあるぬさはいひけるへのあやまり
さ海よりへまかりける時ぬさふくろたまへけり
このうたて

拾遺和歌集にとあるへ海のまかりける人のもとに
。弘資曰

○続古集
ひとつのぬさこすかたのちりをかくるにむすひ袋より
ぬさ入てつかはしそて
旅にぬちまつりむすへるんくまつの神をまつりけるか

入て
まる
巴は
孙文

もとよりもろのまむけのぬさ袋やとおもふ
ゆく海や都にぬさ袋はすさ袋也紙にる條
情にぬさはいろいろのぬさをとりてすさた

のかりぬ神に手向るもの也ちの神よりも
神を道祖神ともさへの神ともいひ手向
乃神ともいひゆへのこぬさ乃きれはしを
たてまつるもの也手向らる手にとりて神にまゐらせけ
ぞたてまつる也されハやのそたむくるもいふ
まはぬさは幣くの咒をさゝくてみえてりそめにハ
紙を用けるにやみな絹の字乃きたくありや
後撰和歌集にあるむかしひけるへのあのかう
さ海よ古へよりのまけつゝふぬさふくろたすけ河
このうたて

拾遺和歌集にあるへの人海のかけるへのもとよ
ぬさふくろむすびぶくろの文まてに渡つかす。弘賢曰この詞
を思ひよみてぬさをむすびを一るにおほくあるのされをとふ
そくたちあむすひあるぬさを造りそしの袋に筆たりそを
あるハあやまり也結袋とは
あるは袋なり本ニハ袋とも 結袋こと本にハ袋とありぬさ入て
源氏物語にまへのおさなくぬさ帝のひろせ
いみくこの筆出るみちの渡りくすさうの
きれとこれのまむけのぬさ袋のやとおか
ゆの海なるぬさ袋ハすゝき袋也もる條
情にぬさはいみへのうちをかりてすさた

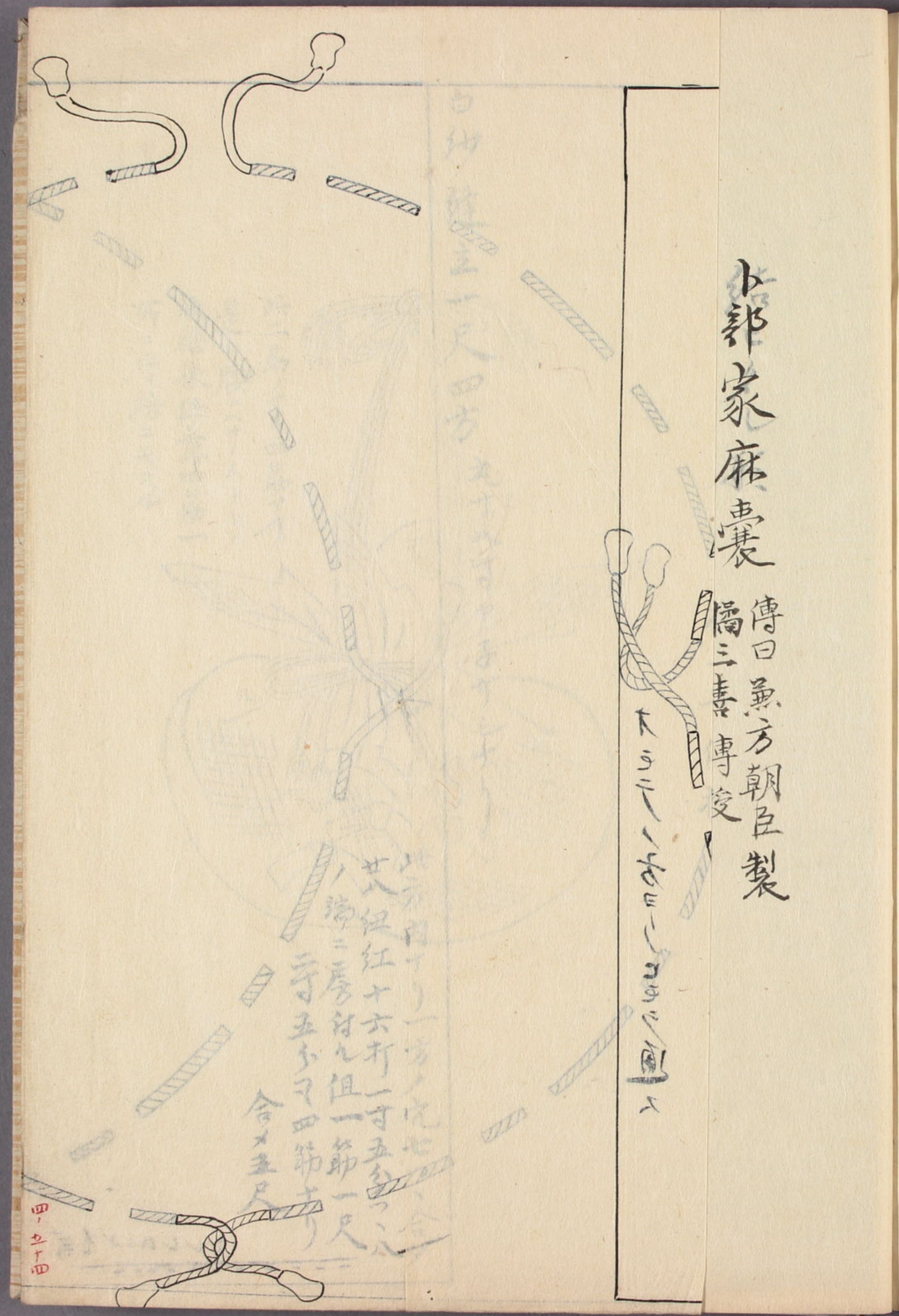
四・五十三

名袋に入れるなり　弘賢曰このすさ袋にてとアミフクロのごとくにこそ　とあり

あやまるなり

## 雜名

ぬさ袋　後撰和歌集　むすび袋　於十和名抄　○弘賢曰むすび袋ふくろアミブクロなり　延喜式玉串條料　生絲二兩　結袋料　これ花驛の函とつくる　細袋　又因離院御受戒記に御石水瓶石綱藤村濃結袋　これらアミフクロの徵なり　すさび袋　河海抄　○弘賢曰すさび袋ふくろアミフクロなり　なりいまだるこのすさびをすさびとつくるをあやまるなり



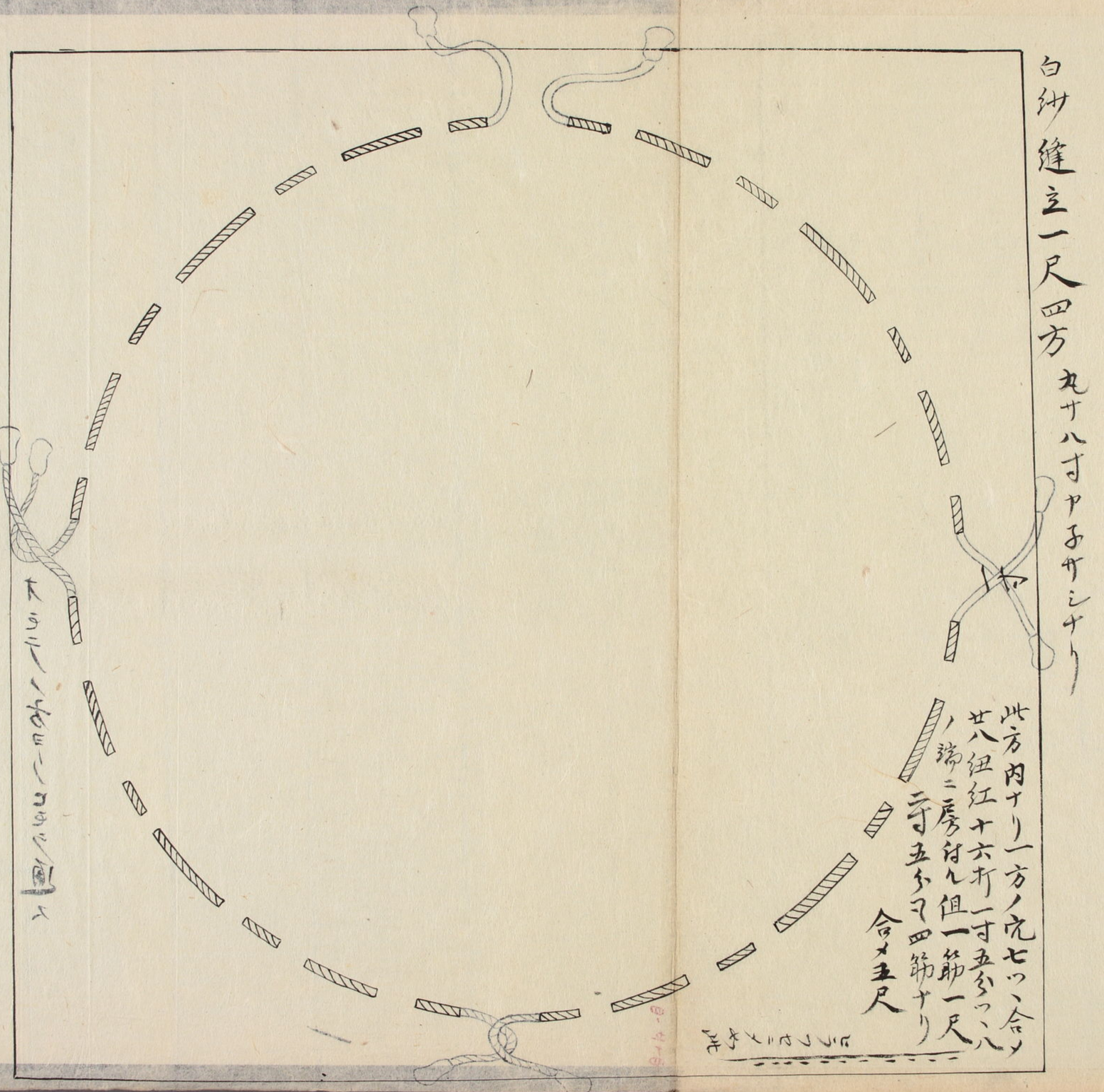
## 下部家麻囊

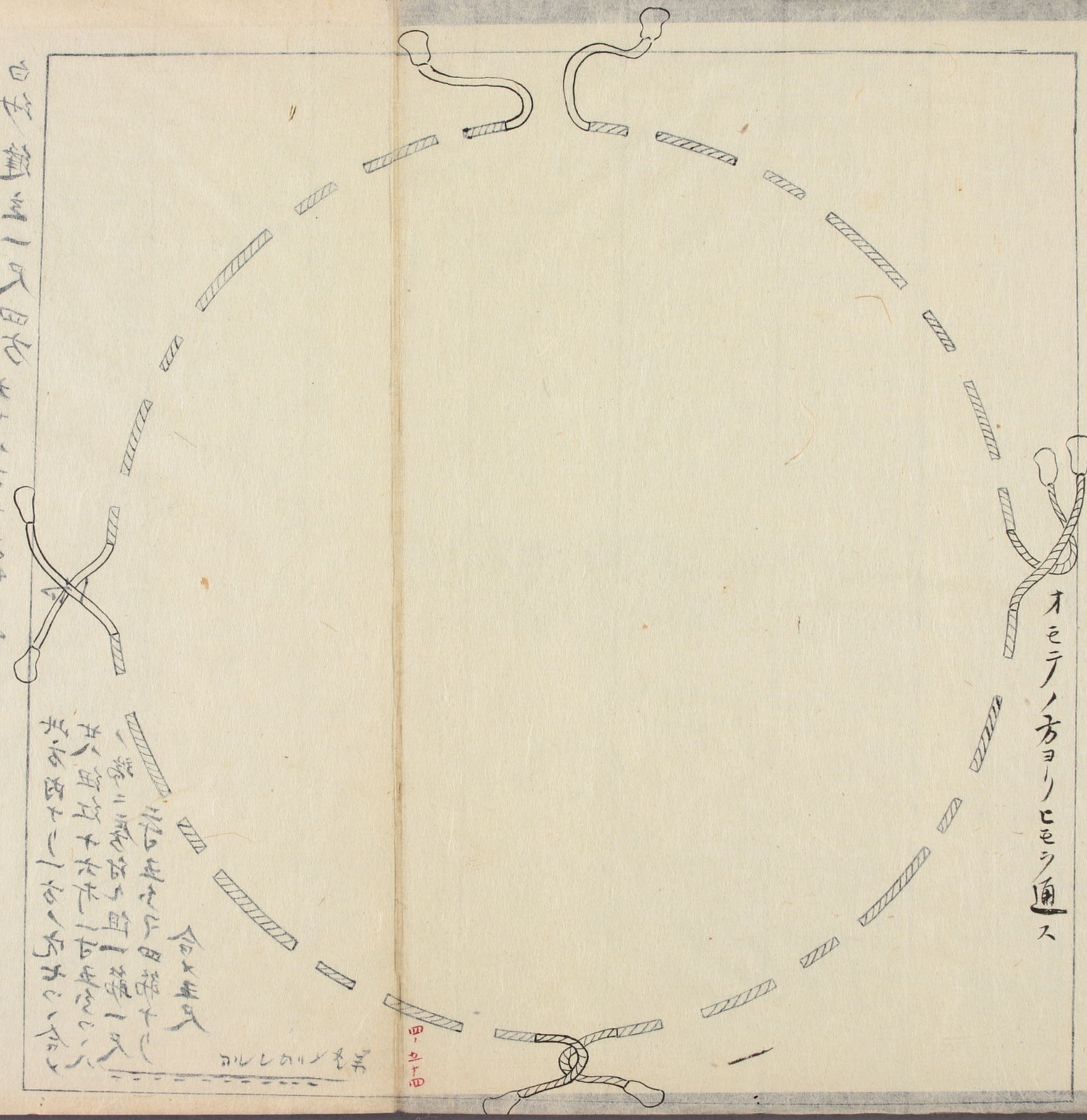
傳曰兼方朝臣製

隔三書專愛

# 卜部家麻嚢

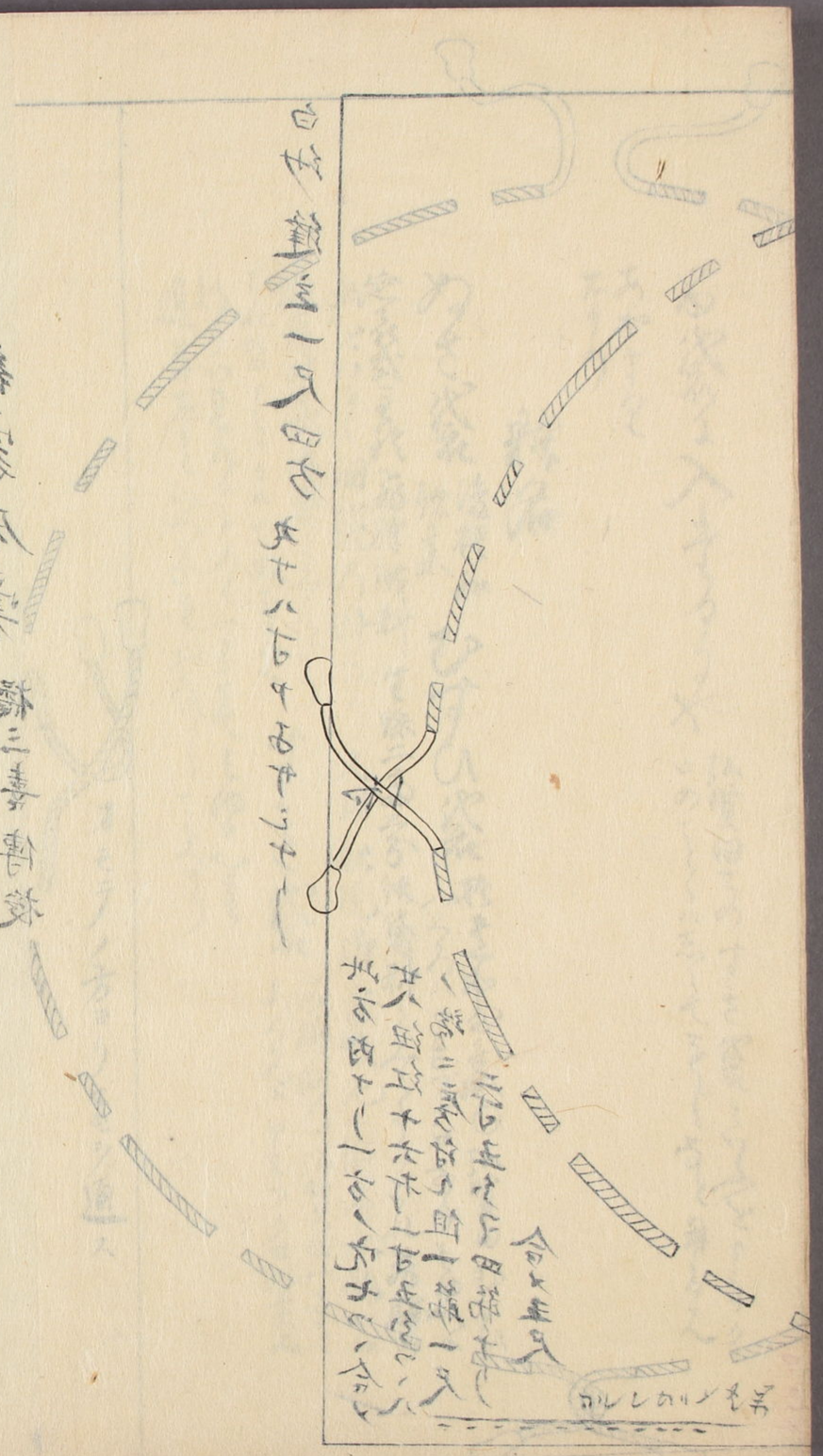
傳曰兼方朝臣製
橘三喜傳授



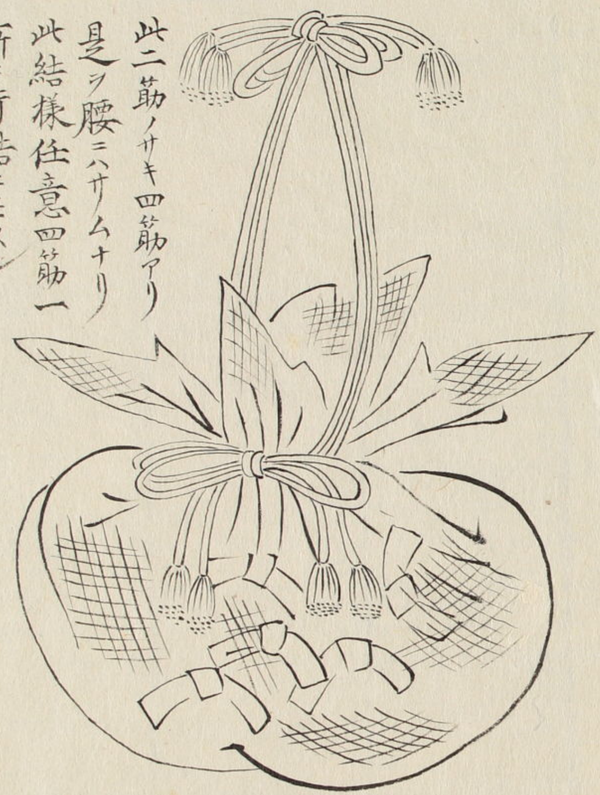



結ヒタル形

辭三毒軌
軌曰無名陣母

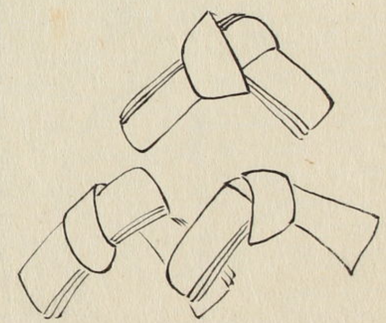


## 結ヒタル形



切麻五十ムスヒ 略ハ廿五

長四寸幅八分ノ五色ノ紙五枚ノ半ヨリ二ツ折テ幅四分トナルヲ一ト結ヒトスル也



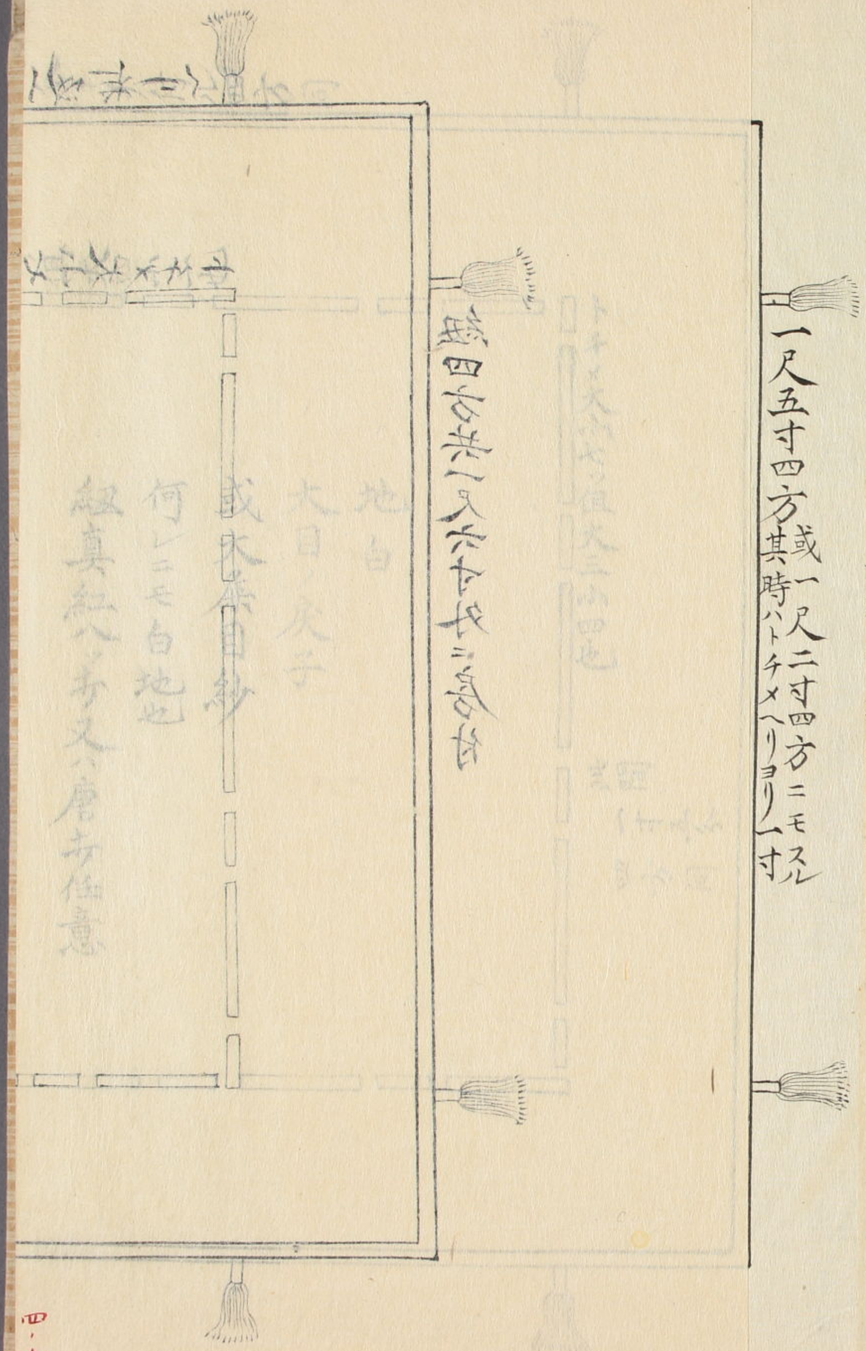
一本云青黄赤白黒紫紫

ヤハラニクスノ

## ト部家麻嚢

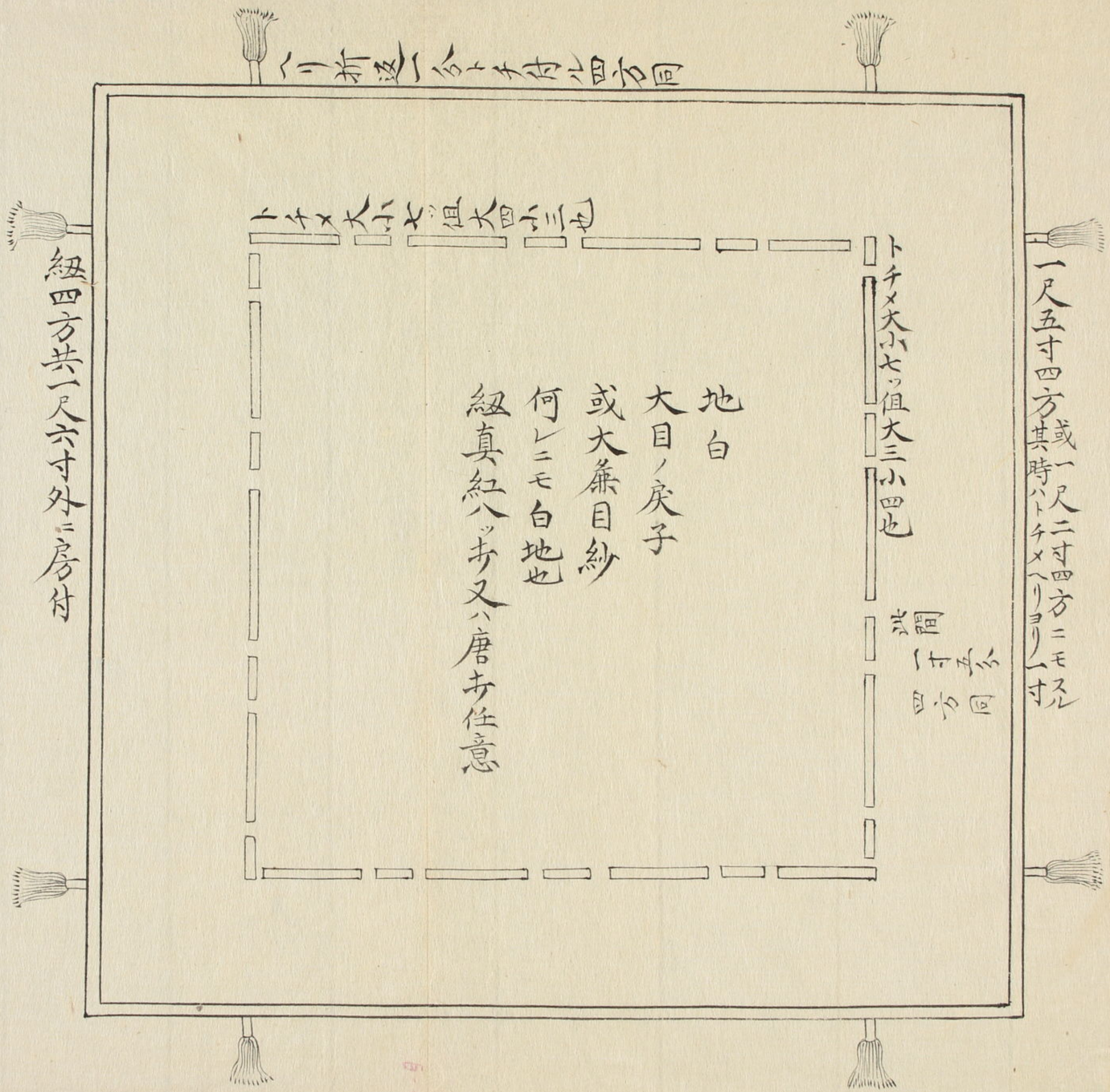
傳曰兼方朝臣製橘三喜柏崎永以傳之

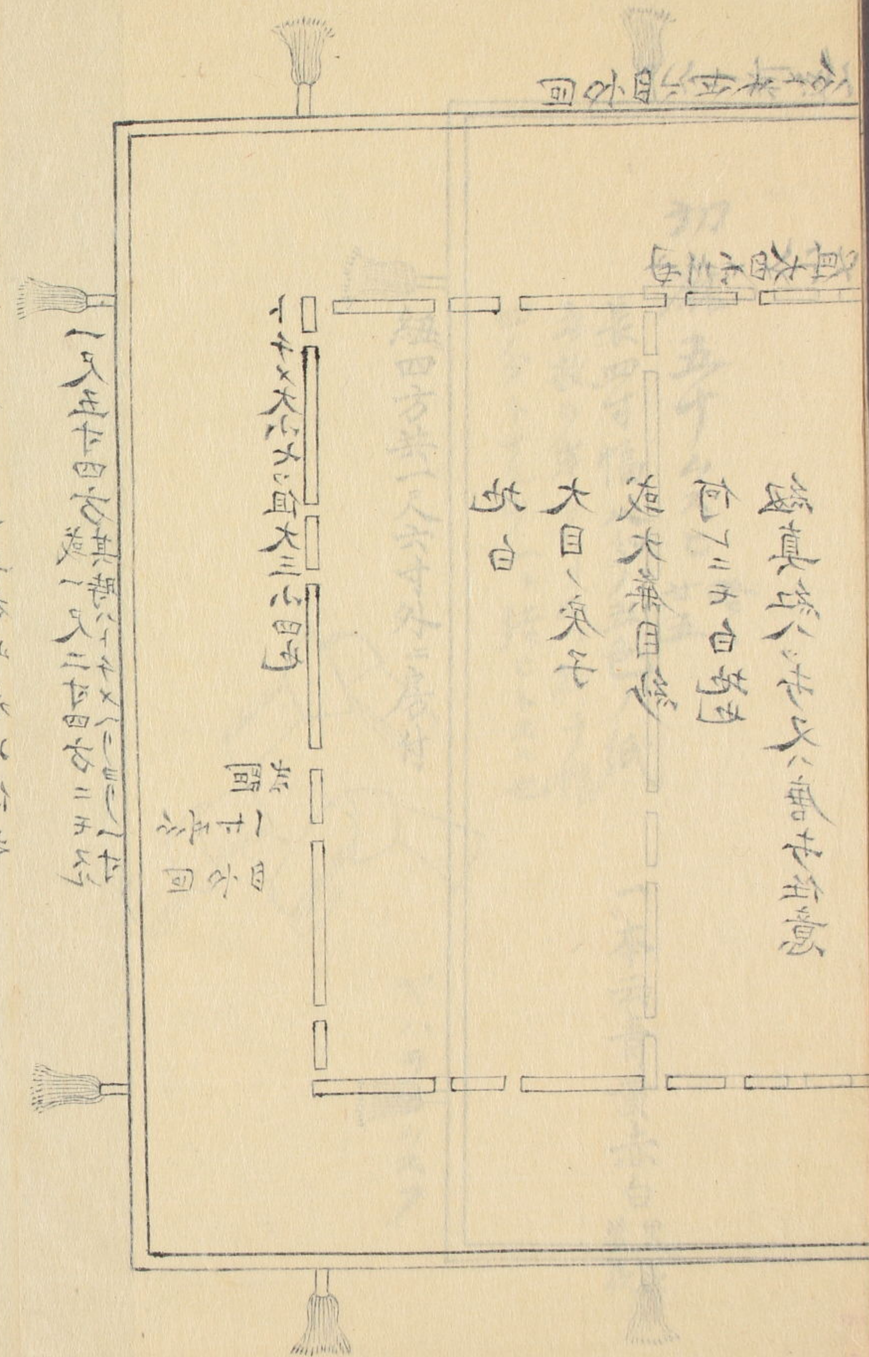
一尺五寸四方或一尺二寸四方ニモスル其時ハトチメヘリヨリ一寸



# ト部家麻嚢

傳日兼方朝臣製橘三喜柏崎永以傳之

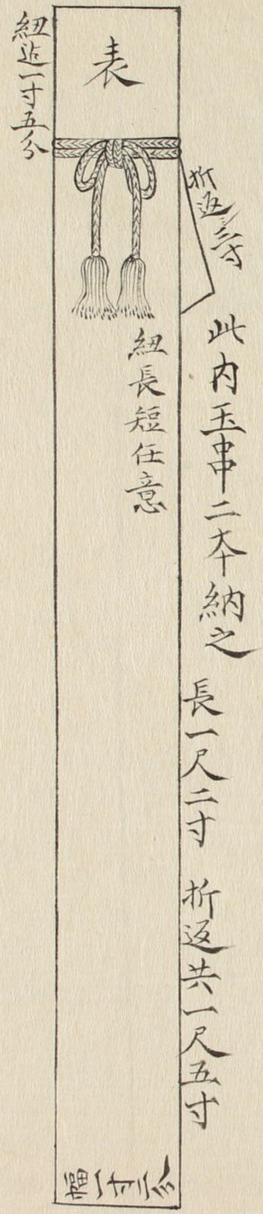




麻嚢　三戸為貞傳　元伊勢内宮祠官之傳也

以大和錦作之略儀用普通錦赤地則白紐白地

則紫紐ニ用組絲裏白麻布

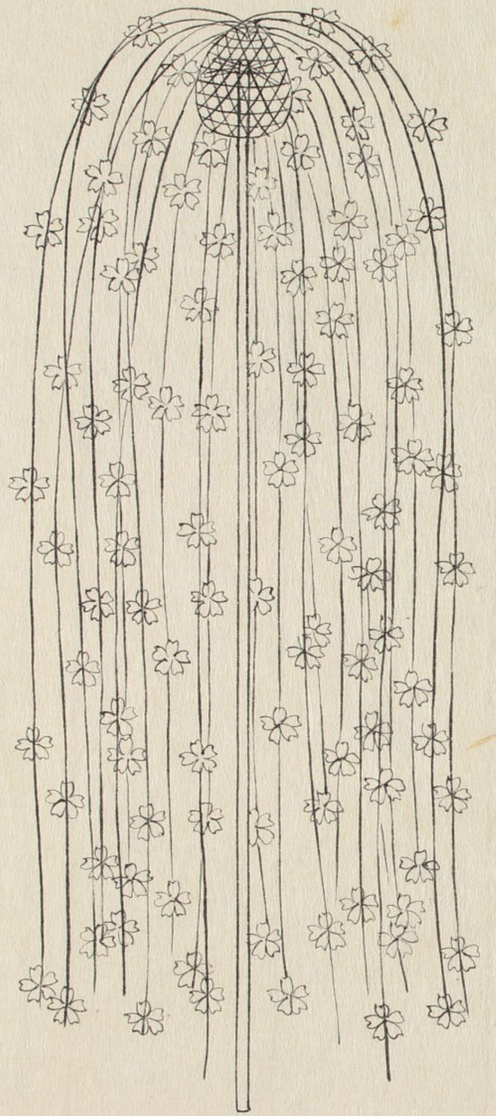



或長八寸折返シ一寸五分合九寸五分幅八分

搢紳家毎朝神拜用之祠官或平人等神拜之時持之代笏是本式也

弘賢曰古之圖古書所記多あり

好古小録所載麻嚢 豊前國宇佐所傳製長一丈許紙革以糊粘



弘賢曰古事記に引て常用の
物語あるを古事記の言葉多の
地名かゝる事はさぬ筆なるべし

四・五十九